歴史講座　「飛越の戦国時代と江馬氏の城」　講演記録

日時：2024 年3月3日（日）　13：40～16：40
場所：神岡公民館

目次

講演1「越中の戦国時代と城館」（萩原大輔）..... - 1 -
講演2「飛騨の戦国時代と飛越の江馬氏関連の城館」（大下永）..... - 15 -
＜対談＞..... - 26 -

講演1「越中の戦国時代と城館」

講師：萩原　大輔（富山市郷土博物館　主査学芸員）

1、はじめに

只今ご紹介に預かりました富山市郷土博物館の萩原です。今日はこの後 3,600 秒かけてお話したいと思いますのでどうぞよろしくお願い致します。今日、私は特急ひだ号に乗って富山から飛騨古川に1時間 10 分ほどかけてやって参りました。私の職場は富山駅から歩いて 10 分くらいの富山市郷土博物館というお城の建物で、模擬天守になっております。戦後の日本で初めて作られた模擬天守ですが、うちの富山城が出来て約 2 か月後に大阪の岸和田城が出来ています。僕はそのお城の中にある博物館に勤めておりまして、この 3 月で 15 年になります。

飛騨にも何回か来させて頂いておりまして、一番若い時に来させていただいたのが、京都大学院の 2 回生の時で今から 18 年くらい前です。今日話題の江馬館に行って学芸員の大平愛子さんにご説明頂き、その日は流葉温泉に泊まって、夜は酒飲みながら先輩の前で研究報告をして色々言われた苦い思い出があるのですが、今日は私の得意分野で話して良いということなので、富山で今まで研究をしてきた越中の戦国時代、特に上杉謙信とか佐々成政とかそういう人との絡みで、今日はその中で

飛騨がどの様に関わりがあるのか、私の方で大まかな話をしましてその後、大下さんの方が細かく具体的に話してくれると思いますので、私の方は適当に聴いて頂ければと思います。

2、日本の戦国時代について

教科書的な話で戦国時代がいつ始まったのかというと、大体 3 つくらいの選択肢があります。まず一つは「嘉吉の乱」というのがあって、1441 年に室町幕府の 6 代将軍の足利義教が殺されるという事件が発生します。これによって幕府の秩序が乱れて戦国時代に入っていくという説があります。一方で一番多いのは「応仁の乱」です。1467～1477 の 11 年かけて戦った戦ですね、最近研究者の間では、応仁の乱という言い方はあんまり良くないのではないかと言われ出しています。応仁は 2 年で終わり、その後文明に変わって行くので実際は文明 9 年くらいまで続いているので、最近は「応仁・文明の乱」といった方がいいのではないかとされています。もう一つ有力なのが「明応の政変」という事件が起こります。これは当時の 10 代将軍・足利義稙という人物が京都から追放されて、今日お話しする越中・富山県にやって来るという事件がおこります。これによって幕府の権威は更に失墜して全国的な騒乱が起きていくんだという説があります。およそ今歴史を勉強している人は、おそらくこのどこかに画期をおいて日本の戦国時代が始まるとしている場合が多いです。

逆にいつ終わるかですが、今までよく言われてきたのが永禄 11 年（1568 年）の織田信長の上洛であります。よく近世 300 年と言われていて、近世とはこの信長の上洛 1568 年からちょうど300年後が明治維新で近世 300 年と言われています。もう一つ言われるのが、室町幕府最後の将軍だった足利義昭が織田信長によって京都を追放された天正元年（1573）に室町幕府が崩壊して、信長の時代が始まるということで、ここが戦国時代の終わりだという考え方もあります。さらには、教科書的にはこれが一番一般的だと思いますが、豊臣秀吉がいわゆる小田原攻めをして、北条をやっつけて天下統一をしたのが戦国時代の終わりだという見解もあります。もっと言えば関ヶ原の戦いだろうという話もあるし、もっと言えば豊臣が滅亡して初めて戦国時代は終わりだろうという話もあって、正直なところどれが正解かという話ではなくて、柔軟に戦国時代を地域ごとに理解していけばいいのかなと思います。

3、越中と飛騨の室町時代から戦国時代

越中は今の富山県とほぼほぼ一致する領域です。越中と今私たちの居る飛騨の国は結構似通った特質を持っています。それは何かと言いますと、いわゆる「ご当地戦国大名」がいないというところじゃなかろうかということです。

僕が生まれた滋賀県だったら近江の国、北近江には浅井長政というちょっとだけ有名な人がいて、南近江には全然有名じゃない六角という武将がいて、その他にも県ごとに大体います。広

島県には毛利とか、鹿児島県なら島津とか、宮城県なら伊達政宗とか決まっているのですが、残念ながら富山県と岐阜県北部にはいないわけです。岐阜県南部には信長とか有名どころが一杯いますけれど。そういう意味で巨大な勢力が根付かなかった地域と考えることもできるんです。

ただ戦国時代の前、室町時代は当然室町幕府が全国を治めていて、各国ごとに守護をおいていて極端な言い方をすると県知事みたいな人が一国一国おかれていると、当然飛騨にも守護はいる。それは次の大下さんの発表で詳しく言われるとおもいます。富山（越中）は畠山という守護がずっとおりまして、畠山は越中だけでなく現在の和歌山県の紀伊国と大阪の河内国、3 つの国の守護でした。結構でかいお殿様だったのです。

ここがやっかいな所で、室町時代には守護の役職の人は必ず京都にいなければいけないという義務付けがなされていて、守護の畠山さんは絶対京都にいるのですが、領地は富山県、和歌山、大阪府とちょっと離れています。今やったら新幹線で通勤できますが、そういうわけにもいかない時代なので、やはり現地の支配は現地の人に任せないと、わけわからん状態になるということで、守護の代官（守護代）といわれる人が国元を治めていました。これはおそらく飛騨も一緒だと思うのですが、越中でややこしいのは守護代が沢山いる。越中は 4 つの郡、新川郡、婦負郡、射水郡、砺波郡に分かれておりまして、そのうちの新川郡、これは現在の富山県の東部ですが、そこを治めていたのは椎名という勢力です。およそ富山県の中央部にあたる婦負郡、射水郡の 2 郡を治めていたのが神保という勢力になります。残った富山県の西部・砺波郡を治めていたのが遊佐という勢力です。この椎名、神保、遊佐が富山をほぼ三等分するような形で治めていた。パワーバランスを保ちながら共同統治をしていた。そういうふうな時代が室町時代だったのです。そのパワーバランスが崩れ出すのが 16 世紀の初頭、つまり 1500 年に入った位に違う勢力が入って来るのです。それが一向一揆です。浄土真宗の勢力が徐々に富山に入り込んで来るわけです。そこに複雑に守護代同士の対立も絡みあって、特に仲が悪かったのは、神保さんと椎名さんという富山県の東部と中央部を治めていた二人の仲が悪かったんです。椎名は富山県の東部で新潟県よりの武将だった。新潟を治めていた越後・長尾（のちの上杉）と手を組んで神保に対抗しようとしたわけです。これを地図で見ると富山県の地図の真ん中神通川が通っており、椎名さんと神保さんが仲わるくて、神保さんの本拠地は今僕が勤務している富山城です。西部には遊佐がいたのですが、1500年代になると一向一揆の勢力が強くなって、東へ東へとやって来るということで越中における戦国時代が本格的に始まる事になります。

本日は史跡の写真を一杯紹介します。富山県魚津市にある松倉城、結構でかい山城遺構で山頂付近にある石碑です、今富山県ではここを国の史跡にしようと頑張っているところです。これが神保さんのライバルだった椎名さんの本拠地です。次は越中に勢力を伸ばしてきた一向一揆ですね。当時の浄土真宗の勢力は、富山では大きな2つのお寺が拠点的な勢力になっていました。一つは勝興寺です。勝興寺は去年、富山県で2件目の国宝になったということで話題になり

ました。今の勝興寺は高岡市にあるのですが、ここに移るのは戦国時代末期になってからです。戦国時代には小矢部市にあり、俗に安養寺御坊と呼ばれて中心的な存在でした。もう一つは南砺市井波にある瑞泉寺です。勝興寺と瑞泉寺が二大巨頭として越中一向一揆を率いて攻めてきたということになります。

ご存じの通り一向一揆は色んな所にあって有名なのは伊勢長島の一向一揆、越前の一向一揆がありまして、加賀にも一向一揆はあって、当時本拠地は尾山御坊と呼ばれていて、現在の金沢城にあたります。その親玉が大坂にあった本願寺門跡です。当時の門跡は顕如です。この一向一揆とも仲が悪かったのが神保です。神保の拠点城郭の一つが、砺波にあります増山城です。神保はもともと金沢よりが拠点でしたが、どんどん東に攻めて勢力を拡大していく。拡大すると拠点が必要になって、拠点にしたのが私の勤め先の富山城です。この富山城を作ったのが神保長職という人物、作ったのは大工さんなんですけれども、作るのを命じたのは神保長職です。この人物、全国的には有名じゃないのですが、知る人ぞ知る武将です。ゲーム『信長の野望』では、めちゃ弱い武将として知られています。現在、富山城は公園整備もされて模擬天守閣の中が博物館になっております。

４、上杉謙信の越中侵攻

上杉謙信は、新潟が本拠地で春日山城ですが、謙信といいますと並み居る戦国武将の中でもトップレベルの人気者でありまして、新潟では謙信公といわないといけない。有名なのは川中島の戦いです。長野県の北部の川中島で武田信玄と何回も戦って引き分けたというお話で、武田信玄の永遠のライバルということがよく言われます。インターネットで「上杉謙信」と調べますと、「軍神」とか「越後の竜」とか呼んでいますが、戦国時代の史料は謙信を「越後の竜」とはどこにも書いてないのです。こういう事は歴史の研究では重要な事で、それがいつ頃から言われ始めたのか、当時の史料に出てくるのか、ここはしっかり線引きしていかないといけないところで、そこが歴史と伝承の大いなる差だと思います。この後私が喋る中で「と伝えられております」と言われたら、萩原は信じていないと思っていると暗にほのめかしていると思っていただいて、それは次の大下さんの講演でもそうだと思いますし、他の歴史研究者でも「と伝えられております」と言われたら、割り引いて聞いて頂きたいと思います。

上杉謙信というと、とにかく義の英雄だと昔から言われています、義を第一に考えた人だと。神仏を深く崇敬し、自らを毘沙門天の化身になぞらえ、自分の野心では決して領土を広げない、自分の為には戦わない、そういったことが今まで言われました。そういうイメージもあいまって大河ドラマでは絶対にスーパーヒーローとして描かれます。

謙信の本拠地が春日山城、新潟県の山城です。上杉謙信の国外出兵、謙信の何が凄いというと、自ら兵を率いていく国外出兵です。普通ある程度偉くなったら行かないのに、謙信は自分が

行くのが特徴的で色々調べていくと生涯に 40 回位、越後の国外に出ています。僕が色々調べた出馬先ランキングベスト 3 を発表したいと思います。

第3位は信濃の国、川中島が有名だから1番信濃に行っているかとおもいきや第 3 位です。第2位が越中の国です。これが10回。能登への1回も含めて 11 回。実はダントツに多いのは関東地方で、特に多いのが沼田とか栃木の上とか群馬県の北部に攻めていっている。その時のルートは今の上越新幹線に近い感じで三国峠を越えて行って関東平野に入るのが一番多いです。

ざっくりいうと長野県に攻めていった時にはだいたい敵は武田信玄、関東地方に攻めていった時は北条、何が言いたいかというと武田も北条もめちゃ強い。上杉も強いけれど相手も強いから、なかなか領土が広がらない。一方、2位にランクインした越中の国はめちゃ弱い、神保も椎名も、一向一揆はそれほど弱くないですが。上杉謙信は色々な所を攻めるけど関東地方には領土広がらないし、一番広くても群馬県の南部前橋より北、長野県も飯山よりも北くらいまでしか領土が広がらない。ところが富山は全部侵略してしまう、更には石川県の小松あたりまで全部領地になります。私は実は謙信は戦国北陸の覇者なんじゃないかと、謙信が一番輝いたのは北陸だと言っています。

謙信の最後の遠征も北陸で、謙信は天正 6 年(1578)3 月 13 日に亡くなっていますが、その半年前から行っていた能登攻めがラスト遠征です。それをまとめたのが、お配りした冊子 1 ページの表です。このように謙信は遠征をしている凄い人だというのが 1990 年代までの常識だったのですが、その常識を打ち破った衝撃的な本が、藤木久志『雑兵たちの戦場』です。この本を大学生の時読んで衝撃を受けました。この本では、謙信は義の為の戦争はしない、米を奪いに行っていると言っています。今新潟は米どころですが、新潟が米どころになるのは江戸時代後期・明治時代で、戦国時代はあまり米が取れない所でした。食料が無いということで民衆を飢えさせないために近隣に攻めて行って稲を刈り取っていく。藤木さんが調べた所だいたい稲刈りの時期に攻めていって、米を持って帰って来るという話でした。領土を広げるのではなく稲を奪って来る。衝撃を受けたのですが、私もその後に勉強を重ねまして、藤木さんの説は半分あっているけど半分は違うのではないかと思っています。この後具体的に見ていきながら、飛騨の江馬がどう関わっていたか見ていきたいと思います。

本日はせっかくなので、ミミズのはった様な古文書を一文字ずつ紐解いていこうと思います。これは『新編会津風土記』掲載の史料です。歴史の史料としては当然本物が一番なのですが、本物が残って無いという場合が往々にしてあります。捨てられた・燃えた・売った等の色んな理由で無くなる。そういう場合、江戸時代とかに戦国時代の文章を写した場合もあり、そういうのもきちんと研究対象として議論していかなければいけない。この史料の日付は、卯月二十八日と書かれています。さらに景虎の署名と判が押してある。本物はここに判が押してあったことがわかります。日付が 4 月 28 日ですが、何年の 4 月 28 日なのかはわかりません。そこは内容を調べていっ

て何年かを特定するのが研究者の腕の見せ所となってきます。この史料は永禄 3 年なのですが、特定の説明は時間の関係で割愛します。

「景虎の事、依怙によって弓箭を携えず候、ただただ節目を以って何方へも合力を致すまでに候」と書いてありまして、つまり依怙贔屓によって戦いは仕掛けない。義の為に戦うのだということです。つまり「私。上杉謙信は依怙贔屓によって戦はしかけません、ただただひたすら筋目だけを以ってどんな人に対しても力を貸してあげるだけなのです」と言っています。これだけ聞いたら凄くいい話なのですが、この時謙信は自分と仲の良かった椎名氏を助ける為に遠征して、神保氏をボコボコにやっつけるわけです

椎名氏にとっては義の人なのですが、それは現代の戦争と一緒で、どっちが悪でどっちが善か難しい所もあります。椎名氏からは善で、神保氏からすると悪で上杉謙信は悪い奴。だから新潟県民にとって上杉謙信はスーパースターで、それは間違いないのですが、富山県とか石川県からするとボコボコに攻められ稲を強奪していく悪い奴、ダークヒーローになります。それは歴史を見る目でどこのスタンスでみるかによって 180 度違うのだという事例だと思います。富山県には上杉謙信に燃やされましたという言い伝えがある寺院がいっぱい有ります。そういった中で謙信は11回富山に攻め込んで来ているのですが、先ほど見てもらったのは最初の一回目の戦争の時の手紙だったのです。力を貸します、協力します、これが謙信のやり方でした。それが途中からどんどん変わって来ます。始めは人助けですが、次 10 年後の史料なのですが、元亀元年(1570)と推定される 12 月、上杉謙信の願文ですが、今でも新年初詣に行って神社に願い事を託したりすることをしますが、それは戦国武将もやっていて神様に「こういう願いを叶えて下さい」ということを文章にして願っている願文の写しです。これも残念ながら原本ではありません。これも面白い史料で、上杉謙信が神仏を深く信仰していたことを証明する史料とよく言われてきました。

「いずれも春二三月中、越中へ馬を出し、留守中当国・関東何事もなく無事にて、越中存ずるままになれば、明年一年、必ず日々看経申すべく候なり」ざっくり現代語訳しますと、「来年三月までに富山県に出馬します。自分が富山に行くから留守にしている間、新潟県さらには関東地方が何事もなく平穏無事で、攻めていった富山県が俺の思い通りになったら、来年一年は必ず毎日お経を読みます」と言っています。この史料を読んで、上杉謙信は毎日お経を読むなんて凄いなぁ、という事で今までは解釈されていました。でも私はこの史料を読んで思ったことが、「一年しか読まへんのか」ということ、神仏を崇敬しているのであれば一年と区切らなくとも良いと思ったのがまず一点。もう一つは「越中が思い通りになれば」といっている点、普通逆で現代人は勉強頑張りますから〇〇大学受からせて下さい、という頼み方をします。謙信は逆で、〇〇大学受からせてくれたら勉強頑張ります。そういう願い事をします。まず望みがあってこれを叶えてくれたら何々をする。条件付きで凄く上から目線なんです。私は、謙信は利己的な神仏観の持ち主だと思っています。このようにあくまで自分本位な自分ファーストなのが上杉謙信だと思います。繰り

返しになりますが、越中を欲しいと言っている訳です。侵略意欲丸出しですが、それを表だって言うとやはり反発を受けるから、富山の武将達にどんな風に言っているかというとまた違う論理を持ち出してきます。

これは2年くらい前に見つかった新しい上杉謙信の手紙です。元亀2年(1571)3月 29 日の謙信の書状です。さっき来年の春 3 月までに攻めますっていうふうに神様に約束してたんですけど、謙信は律儀にその年ちゃんと攻めるんですよね。その時なぜ富山に来たのかっていうのを、能登の武将に説明しています。温井、遊佐、長といった武将の名前が見えます。彼らにこう言ってるんですね、「申し越さるるがごとく、(神保)長職がいろいろ嘆かれ候間、はからずも出馬、17 日神通川渡河」と書いてあって、謙信が言うには、「いや一あのですね、いや領土欲じゃないんですよ。神保長職さんが助けてください、助けてくださいって言うてきはるから、しゃあないから出馬したんです」っていうふうに言ってるんですね。

だから、神様に対しては、いやあ領土にしたい。人間に対しては、これは人助けですっていうふうに二枚舌を使ってるんですね。それは現代の我々でも、意外にどきっとさせられるところがあるじゃないですか。社交辞令で手紙を書いたりするけれども、久しぶりにあなたに会いたいですって手紙書いても、別に会わんでもええわ、とかそういうふうに思ってるときもあったりするように。じゃあこの相反する 2 つの答えを出している謙信はどっちが彼の本音なのかというと、やっぱり私は神仏に対して願っている方を本物と見るべきだろうっていうふうなところなんですね。私なんかは、義を掲げる、それは事実としてあるんですけれども、これはスローガンにすぎないわけでありまして、あくまで謙信はすごく現実主義者であったんじゃないかなあというふうに考えられます。

もう 1 つ僕が面白いなと思う願文を紹介しておこうと思うんですが、これは現在山形県の米沢市上杉博物館が持っている国宝「上杉家文書」の中の 1 つですけれども、元亀 3 年(1572)、さっき見た史料の次の年の 6 月 15 日に出した謙信の手紙なんですが、僕的にはめちゃめちゃおもろいので紹介しておこうかなと。

今度はどんなことを願っているかっていうと、賀州・越中凶徒、つまり加賀の国、越中の国の悪いやつら、ことごとく退散消え失せろいうてるんですね。さらに「雑意消失、越中・信州・関東・越後、藤原謙信分国」ていうふうに書いてあります。ざっくり言いますと、富山県、長野県、関東地方、新潟県、全部俺のもんや、って言ってるのがこの手紙なんですね。で、この頃には 7 回目の北陸出馬をしているんですけれども、戦争を重ねるごとに、俺の領地だっていうふうに言うんですね。これ昨今の現代の国際戦争とも構図が似ておりましてですね、ここは俺のもんや。その俺の領地を防衛するために戦争するんやっていうそういう考えがあるんですよね。そういう戦争の論理っていうのは実は日本の戦国時代から、もっと多分古くからあると思いますが、そういうことなんですね。

これによって別に謙信が悪いやつだって言いたいわけではないです。要はこういうやり方ってい

うのは、別に誰でもするんです。武田信玄だって当然やるし、織田信長だってやるわけで、上杉謙信も、そういった人たちと同じ時代を生きて同じ価値観を持って同じような戦争していたすごい強い人っていうふうに改めていくべきだと。義の武将というのは幻想ですというふうに言ってるところなんですね。

このように領土欲をあからさまにし出した謙信はどんどん攻めていきます。その結果、天正 4 年(1576)、10 回目の越中出馬の頃には、大体富山県の東半分は謙信の領地になっていくんですね。先ほども説明しました通りに、長野県にも攻め込むんだけど武田が強すぎて、ほとんど伸びない。関東にも攻めてくるんですけど北条が強すぎて、栃木県、上野国のちょっと上の部分ぐらいしか、領地にすることはできない。ところが富山県はどんどん攻めることができるというふうなことになっていたわけです。

5、上杉謙信と飛騨の武将との関わり

その中で、ちょっと今あえて飛騨国を白地図にしてるんですけれども、謙信はそういう意味では今日もこの後お話しますけど、飛騨国とは友好関係を結びながら基本的には攻めるというそういう素振りは見せていないんですね。

それはなぜなのかってのまた難しい問題なんですけど、基本的に謙信は上洛戦争も考えているので、その上洛のルート上に飛騨っていうのが構想になかったんだろうっていうふうなこともあるのかと考えられるところですね。歴史にタラレバを言う意味はないんですけれども、謙信はこの後 2 年後に死ぬんですが、もう少し長く生きていたら、おそらくこの後越前から上洛戦争して、織田信長ともう少し激突したんじゃないかなというふうなことが考えられます。

天正 5 年(1577)9 月 15 日に能登畠山の本拠であった七尾城が陥落します。これ、元日の能登半島地震の前に撮った写真なんで綺麗ですけど、今は地震で結構、被害を受けてるんじゃないかなと思います。このとき、織田信長も手をこまねいているわけじゃなくて、一応攻めてくるんですね。上杉謙信と織田信長っていうのは、基本的には友好関係だったんですけど晩年は仲悪くなって、最初で最後激突するのが、「手取川の戦い」という戦いになります。これが天正 5 年 9 月 23 日に行われるんですけれども、謙信が圧勝しまして、有名な史料で謙信が書いた手紙にですね、「信長案外弱く候」って書いてある手紙が残っていて、そんなことを豪語してるんですね。このとき信長本人はいなかったんですけども、信長軍の総大将だったのが柴田勝家、脇を固める武将に、この後出てきます佐々成政、さらには加賀百万石の大名になっていく前田利家、信長軍団のいわばエリートたちがいたんですが、それを上杉謙信は撃破したということになります。

この 2 日後には奥能登、石川県の現在の能登町にあります松波城、これも庭園が国の指定名勝になっているところですけれども、ここを占拠して、上杉謙信はこの段階で能登も平定してしまう。能登を平定してるということは、当然手前の越中も平定してるんですよね。越中・能登

の 2 ヶ国を平定したのが、この天正 5 年 9 月 25 日ということになります。

このような 11 回にわたる上杉謙信の戦いの中で、江馬氏は謙信と友好関係にあったので、協力しなさいっていうふうなことで、出張ってくるわけなんですね。その中で、史料上、確実に江馬さんが越中に来たっていうふうなことがわかるのが現在画面で出している新庄城という場所であります。これは現在の富山市立新庄小学校という小学校が建っている運動場の端っこに、こういう石碑があるんですね。もしこの後皆さん、この後すぐに行きたいというふうなことがあれば、まず、特急ひだに乗っていただいて、富山で降りて、富山地方鉄道に乗り換えます。地方鉄道で、立山に行く地方鉄道じゃなくって滑川とか上市とか魚津方面に行く地方鉄道に乗っていただいて、4 駅ぐらい乗っていただいたら東新庄という駅があるので、そこで降りて徒歩 10 分ぐらいで、ここにたどり着くことができます。ですので、ぜひ行っていただいて、ここが江馬が来た城か、という同じ空気を吸っていただければ、やっぱ違うんですよ。歴史って現場行かないと湧いてこない場合もありますので、やっぱり何か感慨深いものがあります。

この新庄城は、上杉謙信が実際に来てるっていうのも史料上でわかっていまして、あと平成 25 年に新庄小学校の体育館の建て替え工事をしたときに発掘調査をしたんですね。そうすると、多分富山県域ではもう最大級に近い規模の堀と土塁の跡が見つかりました。本当は保存できればよかったんですけど、今ここに体育館が建ってるからそういうわけにいかないので、土の中で保存はされてると思うんですけれども、そういうところにまで、（江馬氏が）行ったということなんですね。

江馬の話はこの後大下さんの方で詳しく読んで聞いていただければと思うんですが、このように謙信は能登も制圧して手取川で織田信長軍も破って、もう人生で最大の版図を築いたんです。まさに彼の絶頂期だったわけです。

ところが、その絶頂期はあんまり続かなくて、能登を平定したわずか半年後の天正 6 年 3 月 13 日に急に死ぬってことになります。俗説ではトイレで死んだってことになってますけど、戦国時代の史料では厠で死んだとはどこにも書いてないので、江戸時代以降に作られた話なんじゃないかなと思いますが、ただ謙信が死んだ衝撃というのはやっぱり大きなものがありまして、上杉の跡継ぎ争いが発生するんですね。謙信は実の子供がいなかったので 2 人の養子、景虎と景勝、この 2 人によって「御館の乱」っていう大規模な内乱が発生します。

これは2、3年続いてその結果、上杉景勝が後を継いで、この上杉の再建をやっていくことになるわけなんですけれども、一時的とはいえ謙信が死んだことによって、上杉はやっぱ弱くなっちゃうんですね。その間隙をついて一気に富山にちょっかいを出してくるのが、織田信長なんですね。信長もやっぱ頭いいなとやっぱ思いますね。基本的には謙信がめっちゃ強かったときはやっぱりよしみを通じていて、謙信が死んだ直後に一気に攻めてくるっていうふうなことになるんですね。謙信が死んだのが 3 月で、その年の 9 月には富山県域に信長軍が入ってくるので、すごいなと思

います。

その時にどうやって入ってきたのかというとおそらく飛騨を通ってるんですね。これは次の大下さんのレジュメでも史料が紹介されてましたけれども、飛騨の国司に命じて、越中に入国したっていうふうな記事が出てくるので、おそらく間違いなく、飛騨ルートで北上する形でやってきたのではないかと。ちょっとこの地図、土地勘がないと難しいんですけど、南が飛騨ですね、北に日本海、この部分の岩瀬っていうのが富山では数少ない観光地ですけれども、ずーっとこう上がってきて、月岡野っていうところで、その上杉の軍勢と信長の軍勢が戦う、富山県域では大きな戦いが行われます。その時に津毛、太田本郷とか今泉ってこういうお城が、当時の史料で出て参ります。

ですので、せっかくだからそこら辺の城跡の写真を紹介しておこうかなと思いますが、これ津毛城の跡です。現在富山市立福澤小学校になってるんですけれども、これが小学校の体育館で、ここら辺が城跡の本丸推定地になっています。

このときの信長軍勢の武将の 1 人だったのが斎藤新五郎利治という人物でして、この人物が陣取ったっていうのが、ちゃんとした史料で出てくるのが、太田本郷という場所でして、これ今何もない田んぼのところなんですけれども、そういう城跡があります。対する上杉軍は河田長親っていう人物がこのとき越中国を取り仕切っていたんですね。上杉関係のドラマとかでは全く出てこない人なんですけれども、結構重要な人だと僕は思いますね。上杉謙信って基本的に、めっちゃ家臣に裏切られる人なんです。私は、それは戦争ばっかりして、部下が愛想つかしたんじゃないかと思ってるんですが、そのように信頼できる部下があんまりいないんですよね。その中で、自分がスカウトして見出した側近に莫大な権限を与えていきます。その代表格がこのお方だと思っておりまして、この河田長親は僕と同じ滋賀県出身の人なんです。上杉謙信って人生で 2 回京都に上洛してるんですけど、そのときに、一説によると、京都観光のときにめっちゃイケメンな美少年がおって、お前いい顔してるやないか言うてですね、俺の家臣にならないかってスカウトして、自分の家臣にしたというそういうまさに股肱の家臣なわけですね。そういう人に奪い取った越中の国を新しく管理させるっていうか莫大な権限を与えて、越中の大名のような立場になっていく人なんですね。そういう人が、謙信が死んだ後も、後継ぎの景勝のもとで律儀に頑張っとったのが、この河田さんでして、今泉城って今写真で出しここら辺に籠っていたということです。

ところが、先ほど言いました月岡野という場所で信長の軍勢とバトルしまして、ボコボコに上杉軍が負けてしまうんですね。現在現地ではこういう小さな首塚がですね、当時の戦いの伝承を残すものとして、唯一残ってるぐらいっていうふうなことになります。この戦いによって、富山県域では信長軍の優勢が確定いたしまして、もうばんばん攻めてくるんですね。信長の軍勢をこの後指揮していったのが、佐々成政という人物だったというふうなことになります。これは天正 10 年(1582)頃の、富山城を中心とした勢力分布図なんですけれども、赤い色で示しているのが、織田信長の領域というふうなことになります。もうこの頃になるともう室町幕府は当然滅んでおりまして、武田もこ

の年に滅ぶわけなんですね。地図では出てきてないんですが、このとき信長の明らかな敵っていうのは、中国の毛利、あと四国の長宗我部、長宗我部は基本的には信長と仲いいんですけど、このときちょっとこじれてるんですね。あと上杉ぐらいしかいないんです。北条は基本的に信長と仲がいいし、あと、島津とか九州の諸大名も基本的に信長と仲がいいんですね。信長からしたらあと毛利と長宗我部と上杉さえ滅ぼせば、もう天下人だったわけなんですね、有名な話ですけど、豊臣秀吉は中国の毛利攻めに送り込んで、明智光秀に援軍を命じたと。で、上杉攻めには柴田勝家・前田利家・佐々成政といった人たちが、引き続き戦っとったんですね。順調にいっとったんですけれども。この年の 6 月に大事件が発生するっていうのは教科書でもよく習うところであります。現場は、現在京都市の油小路通と蛸薬師通の交差点にありました本能寺という場所です。その年の 6 月 2 日の明け方に光秀軍の先鋒 2000 余騎が襲撃して信長が命を落とすと。私は最近、このとき光秀は本能寺に来てなかったんじゃないかっていうふうなことを論文等々で発表しまして、朝日新聞さんにちょっとだけ大きく取り上げてもらったら、もういろんなところからボロカス言われてですね、ちょっとへこんどったんですが、それはいいとして、いずれにせよ、本能寺の変っていう言い方、レジメでも確か、かぎ括弧を付けて書いたんですけれども、すごく嫌いなんですよね。今日はその話をするために来たわけじゃないんで、簡単にだけ言いますけれども、本能寺の変っていうのは、光秀からしたら、目的の 1 つにすぎないんですね、明智光秀って信長を殺してハイ終わりじゃなくて、信長を殺した後、信長の跡継ぎだった織田信忠という嫡男がいるんですけどそいつも殺しに行ってるんですね、二条御所に籠城してたんで、本能寺を攻めた後すぐに二条御所まで攻めてって信忠も殺す。それで終わりでもないですね、そのあとにどうしたかっていうと滋賀県に進むんですね。どこにいたか安土城を攻めようとするんですね。安土城はご存じ通り、織田政権の本拠地なんです。光秀は明らかに信長殺しではなくって、織田政権そのものを転覆させようとするクーデターを起こしたんです。それを本能寺の変っていう言葉に落とし込んでしまうと、光秀の壮大な戦略構想の一部分しか表していないので、私はそれは違うんじゃないかというふうなことを言ってるんですけど、あんまり浸透しないですね。それはおいおい頑張っていきます。

信長が死んだ後は秀吉の時代になっていくって話になるんですが、教科書的には信長の次は秀吉ってのはわかっていることなんですけど、秀吉だって当たり前のように天下人として継承していくわけではなくってですね。その前には何人かのライバルがおったんですね。それが 2 人いました。1 人が織田信雄、もう 1 人が徳川家康です。家康は言わずもがなだと思いますが、織田信雄は信長の次男坊なんですね。長男の信忠がさっきも言いました通り本能寺の変で死ぬんですけど、彼は当時伊勢松坂にいたんですね。彼がこの後、名目上だけの家督相続をしていくってことになるんですが、まずこいつらを倒さなきゃいけなかったんですね。この信雄と家康と豊臣秀吉が、初めて戦った戦い、最初で最後の戦いが「小牧・長久手の戦い」という戦いであります。この戦いは、信雄の呼びかけによって、秀吉包囲網というのが形成されていきまして、それに賛同した

のは先ほど出てきました東海の徳川家康、関東の北条、近畿の根来雑賀一揆、四国の長宗我部、こういった勢力たちが反秀吉網を形成して大規模な戦争になっていたんですね。

そんな中で、当時富山県を牛耳っていた佐々成政はどっちについたかというと、初めは秀吉側についてたんですけれども、小牧・長久手の戦いが 3 月に起こってその途中の 8 月ごろに織田信雄側に寝返るんですね。いっときは優勢だったんですけども 9 月 11 日に、秀吉方についていた、加賀の前田利家と末森という場所で激突しまして、成政は負けるんですね。負けて、こらあかん、大変なことになったとこのままでは負けてしまうというふうなことで考えた、佐々成政は何をしたかというと、徳川家康と、織田信雄に協力を求めに行ったんですね。当時佐々成政は富山にいた。徳川家康は静岡県浜松にいて、織田信雄は愛知県の西尾市にいたんですね。日本海側から太平洋側に行かなあかんわけですね。その間には、北アルプスがあるわけなんですね。しかも季節は12月冬なんですね。それを富山県域の方では佐々成政のさらさら越えといって結構有名なお話でありまして、今でも富山県の方は、立山連峰を越えたっていうふうなことをよく言われます。

これは小牧・長久手においての戦いの対立関係図なんですけれども、ちょっとこれも後ろの方は字が小さくて恐縮ですが、赤色で示してるのが豊臣秀吉側についた勢力。青色で示しているのが織田信雄側についた勢力ということになります。北陸地方に目をやると佐々成政が織田信雄側ですね、金沢の前田利家と越後の上杉景勝が秀吉側についていた。佐々成政は窮地に陥った時に浜松にいる徳川家康に会いたいといって日本海側から太平洋まで日本列島を縦断したということがさらさら越えとこの時立山連峰を越えた江戸時代から凄く有名で版画とか浮世絵にもなっていて、これは有名な浮世絵師・歌川国芳が書いた画像ですが、よく見ると雪山を越えている図です。馬の足が雪に埋まって消えている絵でこれをみたひとがさらさら越えだとわかる史料です。では本当に立山を越えたのですかと、聞かれたら「浜松に行ったのは事実です」と答えます。

浜松にいったのは事実で、それを証明する歴史資料が残っています。例えとしてはちょっとまずいんですが歴史の研究って警察の犯人逮捕に似ていて、証拠を固めて初めて逮捕状が出て逮捕になる。歴史の研究も文献・証拠があって初めてこれこれが事実だと確認出来る。この時はちゃんとした文献が残っているんですね。『家忠日記』という徳川家康の家臣が書いた天正 12 年 12 月 25 日の記録に「佐々内蔵助、浜松に越し候」と書いてあるんですね。「内蔵助」とは成政のことです。こういう史料があるので成政が太平洋側に行ったことは事実だと確定している。ただしどの道を通って行ったかはわからない。色んな説が研究者のあいだでも分かれていまして、一番有名なのは立山連峰を越えていった説（今の立山黒部アルペンルートに準じるルート）、次はこの飛騨を越えた説（安房峠もしくは中尾峠を越え、松本平を南下して浜松に行った）、さらには新潟に行ったんだという説もありまして、これは富山から日本海沿いに新潟に行っていただくと県境に朝日町という町があります。朝日町のところに国道 8 号線をずっと新潟方面に走ってた

ら、境川という川が道路の下を流れてるんです。その境川をずっとたどっていくと、上路という新潟県の糸魚川市の小さな山間集落に出るんです。その上路の山を越えたら、JR大糸線沿いに出ることができるんです。姫川っていう川がずっと流れてるルートに出て、このルートを南下してたらこれまた松本に抜けることができるんですね。そういうルートを行ったという説があります。

私の中での答えは出てるんですが、今日は時間がないので、答えが気になった方は、私が何年か前出した本を読んでいただければと思うんです。ポイントになるのは、この後も出てくるかもしれませんが、村上義長という人物なんです。佐々成政がこの村上義長に宛てた手紙の写し、本物が残ってないんだけど、写しが残ってまして。それによると、さらさら越えの直後、浜松から富山に帰ってきた直後に書いた成政の手紙だと私は思ってるんですが、成政が義長に対して「今度参候処、種々御念入れらる」と書いてありましてさらに「御礼申し謝難き次第に候、其の為、先ず以って使者申し入れ候」と書いてありましてです。「今回あなたのところに行っていろんなことをやっていただいて本当にありがとうございますと、そのお礼の気持ちを伝えるためにまずはすぐに使者を送りました」っていうふうに言ってるんですね。感謝状を出してるんです。だから、この史料から何がいえるかというと、成政が浜松から富山の帰り道に、村上義長っていう人のところによって富山に帰った。つまり、村上義長っていう人がどこにいたのかっていうのをいろんな史料から、それわかることができれば、自然と立山を越えたのか、飛騨を通ったのか新潟を通ったのかっていうのがわかるんじゃないかというふうなことなんですね。村上のもともとの本拠地は長野県の埴科郡の坂城町に本拠地があったんですけれども、村上って武田信玄にボコボコに負けて上杉謙信のとこに亡命する。謙信のもとで結構な中心になっていきまして、この村上義長のお兄ちゃん、山浦景国という人物がですね、海津城という長野市にある結構でかい、城の城主に抜擢されるんです。ところが、天正 12 年の 4 月さらさら越えの半年前ぐらいのときにこのお兄ちゃんが失脚しましてですね、新潟に更迭されてしまう。そのときに、弟の義長さんはどこに行ったかというと、一緒に、新潟県に行ったんじゃなくって、当時の史料に、高原に来たっていうふうなのが出てくるんですね。ここら辺に来たらしいというふうなことなんです。高原に来て、そこから佐々成政に手紙を送っていて、何とか助けてくださいみたいな手紙を残してるんですね。それに対する成政の返答は猪谷に移れっていうふうに言ってるんですね。要は飛騨と越中の国境地域でどこかで、ちょっと安全に身を隠しなさいっていうそういう指示があった。そういった中で、この年の 12 月にさらさら越えが行われて佐々成政は、村上義長さんのもとを通ってるってことなんで、僕は佐々成政は高原を通ったんじゃないかと。ここら辺を、通ってたんじゃないかというふうに思ってるわけなんですね。安房峠か中尾峠を使った可能性がすごく高いんじゃないかというふうに考えています。ただし、頑張ってさらさら越えをして、徳川家康に会って、富山に帰ってきたわけなんですけれども、その翌年、天正 13 年の 8 月には、豊臣秀吉が 7 万人の大軍を率いて富山に攻め込んで来るんですね。その結果成政は降参するってことになります。最後に出してるのはこれ、江戸時代の絵本なんで

すけど、右で偉そうにしてるのが秀吉で、左で土下座してるのが成政。降参してるシーンを描いてます。真ん中には千成瓢箪が描かれてるってことで、これが秀吉の絵だってのはちゃんとわかるように工夫されているんですね。このときに、秀吉は成政だけを滅ぼしたんじゃなくって、成政は飛騨の有力大名であった三木と仲がいいんですね、秀吉はその時に、三木も滅ぼしにかかっていて、富山を攻めこんだ後さらに飛騨まで攻め込んできて、三木が滅ぼされてしまうと、その結果入り込んでくるのは、金森っていうふうなことになってくるんです。

ですので、飛騨と越中の戦国時代の画期というのは実は終わりの点ではすごく一致していて、これ以降富山県では佐々がいなくなって前田が入ってくるんですね、明治維新迎えるまでずっと前田です。飛騨でも、金森っていう近世に続く大名が入ってくることによって、飛騨の戦国時代というのは、一定の終わりを告げるというふうなことになります。

私の話は、これで終わりにしたいと思います。皆様ありがとうございました。

— 了 —

講演2「飛騨の戦国時代と飛越の江馬氏関連の城館」

講師：大下　永（飛騨市教育委員会　学芸員）

はじめに

続いてよろしくお願いします。飛騨市教育委員会の大下です。私は萩原さんのお話ほど面白くは話すことはできませんので、どうかご了承ください。あと、三好さんも関西のご出身なんですけども、私は地元の人間ですので、お 2 人の関西のノリについて行けないと思いますけれども、どうか温かく見守ってください。私は 40 分しか与えられておりませんので、ちょっと早口になるかもしれませんが、よろしくお願いいたします。私は飛騨側の視点から、江馬氏と越中のお城についてお話をしたいと思います。

本日、私の話は以下の 4 点になります。まず地元の方はご存じかと思いますけれども、概要として飛騨の戦国史がどういう時代だったかというお話したいと思います。2 点目に、おそらくこれは近世以降の記録が多いんですけれども、飛騨の武将がいたと伝わっている越中のお城っていうのがどこにあるかっていうのをまとめていきたいと思います。3 点目として、私も文献の専門ですので、文献にどういった記録があるか、当時どういう史料に載っているか、お話をしたいと思います。最後に、中地山城と論田山城というお城が富山県の南部にあります。こちらが江馬氏の城と伝わっているんですけれども、どのような縄張りになっているか、立地の関係をまとめていきたいというふうに思います。

１、飛騨の戦国史

飛騨の戦国史についてお話します。越中は守護に畠山氏がいたと萩原さんの話にありましたが、飛騨の守護は京極氏でした。京極という一族は、あんまりピンとこない方も多いかと思います。やはり基本的に京都にいて、飛騨にはいない人になります。本拠は滋賀の方なんですよね。今日いらっしゃっている萩原さんも同じ滋賀県のご出身ですが、東部の方に京極氏の館跡があります。守護としては近江もそうなんですけれども、飛騨だとか、隠岐とか出雲、当主によっては上総など、いろいろ持っていました。しかし、当主の方が飛騨にいたという記録は全く無くて、現地の支配は守護代や被官に任せていました。或いは独立してる江馬氏のような領主が支配していたっていう形です。これが、応仁・文明の乱が始まるぐらいまでの飛騨の歴史ですね。

今我々がいる高原郷、神岡とか上宝の方には江馬氏がいて、古川盆地にはお公家さんで飛騨国司家の姉小路氏が治めていました。こちらも先日、国の史跡になった山城跡（姉小路氏城

跡）があります。姉小路氏は、古川・小島・向という 3 つのお家に分かれます。戦国時代になってくると、守護の被官であったと伝わる、これ「伝わる」というはよくわからないということですけれども、三木氏という一族が下呂の桜洞というお城を築いて、飛騨南部で勢力を拡大していきます。その他に今日はちょっと触れないんですけれども、白川郷周辺には、内ヶ島という一族がいたり、現在の国府町周辺・広瀬郷には、広瀬氏といった一族がおりました。

これらを位置に落とすとこのような図になります。これは 15 世紀後半頃を想定した図になります。北部に江馬氏、現在の古川盆地に姉小路氏、広瀬郷に広瀬氏、白川郷に内ヶ島氏、南部が三木氏という形です。高山盆地・清見・荘川あたりはお公家さんの領地、或いはお寺の領地っていうのがあって、どの武将というのはあまりなかったんですけれども、16 世紀になって戦国時代が深まってくると、三木氏がどんどん北部の方に進出してくるというような流れとなります。

その後の流れになりますけれども、16 世紀（1500 年代）になると姉小路氏が力を落としていって、逆に三木氏が勢力を拡大していきます。永禄3年、三木良頼という人物が朝廷に正式に願い出て、姉小路家の 1 つであった古川という家の名跡を継ぐということがあり、「姉小路良頼」と名乗るようになります。さっき萩原さんが言われたゲームの「信長の野望」に姉小路頼綱なんていう人が出てきますが、多分神保より弱いんじゃないかという、有名なキャラがいるんですけれども、それがこの三木良頼の息子・、三木自綱にあたります。ただ、実際文献上はずっと三木と言ったりしてて、姉小路っていうのは京都周辺でしか名乗っていません。もともとの姉小路氏自体はお公家さんの方ということです。その姉小路氏もどんどん勢力落としますので、古川とか高山盆地の広い範囲が三木氏の勢力下になります。一方、江馬や内ヶ島という一族はそれぞれの領域を、戦国時代終わるぐらいまでどうも保持していたようです。このような勢力が残る中で、上杉とか武田とか織田といった国外の勢力との対応に追われるというのが 16 世紀の後半の飛騨の武将たちのあり方ですね。

戦国時代、飛騨における結構大きな事件が 3 つあります。この 3 つさえ覚えていただければ割といいのかなっていうような大きな事件です。まず 1 つが永禄 7 年に、武田信玄本人じゃないんですけども武田の軍勢が、飛騨に攻めてくるということがありました。それに応じてですね、武田が飛騨を取ると困るということで、上杉謙信も川中島に出て牽制するんですね。この時、武田信玄も川中島にいるので、武田も飛騨に兵力を割く余力はないということになり、飛騨から撤退する。これがいわゆる「第 5 次川中島の戦い」です。その戦いに実は飛騨の武将も関係しているってことですね。その時の飛騨における武田方の武将が江馬時盛、上杉方の武将として、江馬輝盛と三木良頼がいたということが、しっかり当時の史料でわかります。今日お配りしている『天地を翔ける』の漫画は、このときの時盛と輝盛の対立が描かれております。

続きましてちょっと時代が飛びますが天正 10 年 10 月、「八日町の戦い」と言われている戦いがあります。（永禄 7 年に）江馬時盛が降伏して、その後は輝盛が江馬家当主になるんですけれ

ども、その輝盛と、三木自綱との戦いであります。ここで輝盛が討ち死にをしまして、江馬勢が敗北をするというような大きな事件があります。ただ、江馬氏はここで滅びたというわけではなくて、どうも跡継ぎの時政という人がその後も領主として活動しているというのが文献史料で確認できるので、ここで完全に三木氏が飛騨全部を治めたというのはちょっと認識が違うのかなというふうに私は思っております。

そして最後、萩原さんのさらさら越えのお話に関連するんですけれども、天正 13 年閏 8 月に羽柴秀吉の命を受けた金森長近が飛騨に攻めてきて、三木を滅ぼし、後に飛騨を拝領するということがありました。これで飛騨の戦国時代が終わるというような認識です。

金森長近はその時に、「高原江馬知行分」というところに、「これから戦いがあるけど、乱暴とかしないようにね」っていうような内容の禁制（史料 44）を出しています。どうも、まだこのときに江馬氏の知行つまり領地があります。江馬氏は生き残っていて、金森氏が滅ぼす対象とはなっていなかったということです。そういったところから、やはり三木氏が飛騨全土を収めていたという通説は厳しいのかなというふうに思っているところがあります。ただそのあと、江馬氏の記録も途絶えるので、その辺がちょっと謎の部分もあります。この絵は八日町の戦いで、指揮を執る江馬輝盛の画像で、明治初期に作成された『斐太後風土記』の挿し絵ですね。

２、飛驒の武将が在城したと伝わる越中の城

2 番に移ります。飛騨の武将が在城したと伝わる越中の城をまとめています。調べてみますと、川の水系で勢力が分かれているのかなと思っています。富山県を流れる神通川、飛騨では高原川と宮川が越中の猪谷の付近で合流して神通川になりますが、この神通川流域には三木系の武将が入ったと伝わっております。猿倉・岩木・津毛・今泉といった城があります。津毛や今泉は先ほど萩原さんの話にあった、月岡野の戦いで出てきたところですよね。そういったところは、江戸時代の記録に三木系の武将がいた、ということが記されています。

一方、江馬については、常願寺川沿いの城に記録が伝わっています。中地山城というところに、江馬の家臣・河上中務丞富信という人が在城したと伝わります。その近くに論田山城、或いは小見城と言われているお城があります。両方とも地名を取ったお城の名前なんですけれども、こちらについては、江戸時代の記録にもないんですよね。何で江馬氏の城と言われてるかっていうと、富山県内で出されているお城の報告書などで、立地関係もあって江馬がいたんじゃないかと、河上中務丞がいたんじゃないかということが推定されているということで、挙げております。細かいですが皆さんのお手元の資料の図 11・12 ページに、お城の位置を示した地図を挙げておりますので、またご覧ください。見ていただきますと、神通川沿いに赤い点、これが三木系の武将の城です。常願寺川沿いには、青い点の江馬氏関係の武将がいたらしいという表現になります。

これらの位置関係をグーグルアースでツアー動画を作ってみましたので、見ていきたいと思い

ます。（この範囲が）今日お話があった春日山城から越中・能登あたりですね。南側に飛騨が位置し、たくさんお城があるということがわかるかと思います。

江馬の本拠の神岡の範囲、ここに江馬氏の山城と下館というふうに伝わっている場所があります。今皆さんこのあたりにいます。これが江馬館のある公園で、これは本城の高原諏訪城ですね。そこから和佐保を超えていくと、山之村があり、昔の街道や峠道がありました。山之村を越えた唐尾峠、ここを越えていくと、「ウレ往来」と言われる山岳地帯を通る中世のルートがあります。動画では明治に作られた陸軍の地図から道筋を落としております。本当にこんな山が深いところ通ったのかなって疑いたくなるような険しい道です。ここから富山に入っていく、その位置に中地山城と論田山城があります。常願寺川の対岸には芦峅寺・或いはちょっと離れたところに池田城ありまして、どうもこちらは江馬氏と敵対する勢力だったようです。中地山城の方に戻ってきまして、さっき新庄城へ江馬が参陣したという話がありましたが、新庄城に向かうため江馬輝盛が通ったルートを何となく示しております。で、こちらが萩原さんの職場の富山城です。そして、皆さんよくご存じのファボーレが近くですね。江馬氏関連の城が点在する常願寺川の沿いは、こういった立地関係です。

次に神通川沿いの立地を見ていきたいと思います。高原の方に戻ってきて、高原川を下っていくと、跡津川との合流点に土城という城があります。ここから跡津川を上っていく、さきほど見た有峰に通じています。高原川をさらに下っていくと猪谷があります。猪谷をずっと超えていくとこういうカーブの道があって、ここに猿倉城という山城があります。これは三木家臣で塩屋秋貞という武将がいたと伝わります。同じく近くに栂尾城という城があります、こちらも塩屋氏の在城と伝わります。また、ちょっと内陸・黒川という川沿いの道は、これまた神岡に通じているんですけれども、ここに樫ノ木城という城があります。続いて先ほど萩原さんのお話出てきた津毛城も、塩屋氏が在城したと伝わるお城です。猿倉城に戻りますが、やはり富山平野の出入りを押さえる位置にあることが分かります。またちょっと進んだところの下流に岩木砦がありますね。こちらは越中衆の斎藤氏が守っていた城生城を三木氏が攻めるために築いた砦と伝わります。次が今泉城ですね、萩原さんのお話にもあった津毛城の近くで、月岡野の戦いではともに上杉方の城として使われました。富山城との位置関係もお分かりいただけるかと思います。最後に、萩原さんは多分成政が通っていないというお話でしたが、ザラ峠がここですね、ものすごい山岳地帯にあります。というような形で、ツアーは終わります。

３、史料に見える飛騨の武将と越中・上杉謙信の関係（江馬氏を中心に）

今度は文献のお話をしたいと思います。ある程度確かな史料、手紙などの一次史料、或いは日記などの記録、さらに二次的な史料であっても江戸時代の初期までに書かれたある程度確かな記録で、事実関係を整理していきたいと思います。今回の配布資料見ていただくと、ものすごく

量がありますね。私が越中に関して不勉強だったので、今回に合わせていろいろと調べていったので、この資料は私の勉強の成果でもありますが、この分量を 40 分の中ではお話ができませんので、今日は概要だけお話していきたいと思います。もし興味がおありであれば、関連年表とか、関連史料というのが後ろの方についています。もしかしたら、誤植などでちょっと違う部分ももしかしたらあるかもしれませんが、見ていただくと今回触れることができない。時代背景とかも、ご理解いただけるのかなというふうに思っております。今日お話しするのは、富山に江馬氏が言ったのはどの辺までかっていうふうな話になるので、私のお話の中では、天正 10 年以降の、さらさら越えとかその辺までちょっといけないかとは思いますけれども、もし可能であれば、対談でお話ができたらいいかなというふうに思っております。

まず、越中と飛騨の関係の始まりは、武田が攻めてきた永禄7年夏です。飛騨に武田軍が攻めてきて、10 月に上杉輝虎、この当時謙信はこのように名乗っているんですけれども、上杉輝虎から、河上式部丞富春という江馬氏の家臣に書状を出しています。同様に輝虎の家臣・河田長親から、江馬家臣・河上中務丞富信という人に書状を出しているということがわかります。ちょっとこの「何とかの丞」という表現は長いので、この富春とか富信といった言い方で表現をしていきます。どうもこの時、河上氏を通じて、江馬輝盛と上杉謙信との関係ができたのかなというふうに思われます。三木氏でいうと三木良頼がこの中の文章が出てきます。上杉氏と三木もこのころは友好関係です。つまり上杉謙信と三木良頼の友好関係が、このときできたというような形ですね。

次に元亀元年 8 月の史料になります（史料 29）。この史料は、いろんな研究者の方があやしいというふうに言われているところがあるんですけれども、ここまで細かい記載があるということで全部は嘘と私は思っていないので、今回紹介させていただきます。これは上杉輝虎が、さっき萩原さんが紹介されていた村上国清（山浦景国）に、飛騨の武将に「こうして欲しい」というような要望を伝えているような内容です。その中には三木良頼は、飛騨の自分の城を明け渡して、新庄城に移った方がいいんじゃないかとか、樫ノ木城にも在番するようにしたほうがいいんじゃないか、とか書かれています。さらに謙信が上洛するときには、飛騨勢は越前北之庄・今の福井市あたりまで出るようにということを言っております。また良頼の人質として、塩屋筑前守（秋貞）や馬場才右衛門尉という人が来たというようなことが書かれています。どうもこの史料を見ると、上杉謙信が三木良頼にすごく大きな期待を寄せているということが分かります。江馬氏ではなくて三木氏なんですね。ちなみに、画面に示しているのは樫ノ木城の縄張り図が富山県の報告書に載っていますが、大きな平坦地が連なる居住性が高い構造のお城です。

次に人質として越中の上杉軍に来ていた塩屋秋貞ですが、どうも元亀 2 年 4 月に急遽退いて猿倉城の改修を始めだして、不審なことをしてるぞ、いうことが上杉方の史料に残っています。三木氏と上杉氏は友好的と言いながらちょっとあやしい動きをしているというのが記録にあるということです。しかしこの史料についても年が抜けているので、元亀 3 年とかいろいろ説がある中で、

状況から元亀 2 年の史料ではないかと私は想定しています。この写真は猿倉城から神岡側を見た神通峡を見た景色ですけれども、やはりすごい眺めがいい場所で、敵が攻めてくるのを警戒するに良い場所だということがわかるかと思います。

続いて、これが先ほどからお話がある新庄城に、飛騨の武将が来たというような記録です。元亀 3 年の 9 月、上杉謙信の第 7 次出馬に際して、江馬輝盛が新庄城の上杉軍に参陣したということは、当時の記録にしっかり残っています。しかし直後に輝盛は上杉謙信に断りなく帰国してしまうということも史料に残っています。この史料を見ると、謙信が「どうしたの」「びっくりなんだけどなぜ帰っちゃうの」みたいな、ちょっと気を使ったような表現なんですけども、そういったことを伝える史料が残っています。多分この時期、謙信は大規模な軍勢で攻めてきているわけで、その中で飛騨の武将にもお呼びがかかったんですけれども、あんまりやることなかったのかなと思います。居るのも大変だし冬も近づいてくるしということで、どうも帰ったんじゃないかなというふうに私は思っています。

一方、謙信は期待を寄せていた三木良頼にも、ぜひ来て欲しいとラブコールを送ります。しかし、良頼は自分はもう重病で明日もしれないと、すぐ死んじゃうかもしれないということで、息子の自綱を行かせるというようなことを言っている史料があります。ただ、そのあと 11 月にですね、良頼はやっぱり病気で死んでしまいます。そのあとに自綱が越中に来たのかというと、多分記録としては残ってないんですけれども、そのあと、三木氏は織田信長についてしまうので、多分来てないんじゃないかなと思います。まとめると、元亀3年の謙信出馬に際して、飛騨の武将にも参陣の要請があり、江馬氏は新庄に来たけどすぐ帰っちゃった。三木氏は良頼から自綱への代替わりを契機として、この後は織田方に転じるというような形です。

さっきも萩原さんの話にもありましたが、新庄城の発掘では、大きな掘が見つかっていますが、どうもこれは謙信の時代じゃなくて、1 つ前の時代じゃないかということが報告書に書かれています。後世の開発で上の層は飛んでしまっていると書かれていましたので、謙信の時代の新庄城がどういったところだったかっていうのは、残念ながら不明です。

続きまして、天正4年 8 月、上杉謙信が越中・能登に出馬してこれで謙信は越中をおおよそ手に入れるというような戦いがありました（第 10 次出馬）。このときに謙信は、栂尾城と増山城と湯山城というところを占拠し、越中を平定したということを言っています。その時に飛騨口 2 ヶ所の砦を立てたということを書いてあります。飛騨口の 2 ヶ所については具体的には書いてないんですけれども、位置的には猿倉城と栂尾城の 2 つの城がちょうどあたるのではないかと思われます。つまり、塩屋氏とか三木氏はこのときには上杉氏と敵対関係で、それを謙信が抑えるために、猿倉城や栂尾城といった砦を増築したのかなと思います。このことから、天正 4 年段階には三木氏の勢力は越中にはいないということが、言えるのかなと思います。

その翌年ですね、謙信の人生最期の出馬と言われている第 11 次の北陸出馬ですね、このと

きに、江馬の家臣・河上定次に対して、上杉謙信が書状を送っています。ということは、江馬氏はまだこの時は上杉方ですね、三木氏は織田についているんですけれども、江馬輝盛は一応上杉謙信と友好関係ということなんですよね。書状の内容としては、今度北陸を攻めるんだけれども、織田信長の軍勢がどうも飛騨から来るような情報もあると、だから気をつけてね、そういった内容になります。実際それは誤報になるんですけれども、そういったやりとりが残っております。

このような状況から大きく変わるのが、謙信が死去する天正 6 年 3 月です。このあと信長の動きが早くて、次の月には、神保直住という武将、神保長職の息子で信長の元に逃げていた人物なのですが、信長はその人を呼び寄せて、越中を制圧しなさいという命を出します。さらに三木自綱に協力を依頼するということが『信長公記』に書かれています。なので、神保長住はどうも飛騨経由で遠中に入国したんじゃないかなというようなことが推測できます。

これに関連して年が書かれていない 6 月 28 日付けの史料がありまして、天正 10 年などいろんな説があるんですけれども、あえて本日の内容に近づけて考えてみると、神保の越中入国にあたって高原郷で三木と江馬の戦いがあって、三木方の武将に首 1 つとったということに対する、お礼状だと考えることができます。三木氏は織田方として長住に協力しているんですけれども、謙信が亡くなってすぐという段階なので、以前から上杉氏方であった江馬氏と三木氏の対立関係というのが表面化したとも考えられます。後に八日町の戦いが起きる近辺で、もしかしたら三木或いは越中の武将を巻き込んだ戦いが起きた可能性がないかなというふうに思っております。

そういったことでずっと上杉方であった江馬輝盛ですけれども、最終的に天正 10 年 2 月には織田方に転じてしまいます。これは、江馬輝盛が、織田家臣の矢部善七郎という人に、人質を出すので信長に取りなしをお願いします、という内容の史料が残っています。これは武田氏が滅ぶ甲州攻めの最中なんですよね。甲州ももうすぐ落ちる。越中を巡る情勢も、6 月 3 日、本能寺の変と同じ日に上杉方の魚津城も陥落してしまって、織田方に落ちてしまう。もうこの後はいよいよ上杉を攻めるだけ、みたいな形となります。本能寺の変がもうあと 2 ヶ月ぐらい遅かったら上杉氏も武田氏のように滅びていた可能性もあります。そんな中で本能寺の変が起きるんですけれども、その前に江馬氏は、もう遅きに失しているんですけれども今更っていう感じで、織田に取り成しを求めています。最終的には織田方につこうとしています。

まとめますと、永禄7年にまず謙信と飛騨の武将の関係ができて、元亀 2 年～3 年に謙信が越中を攻めるときに、飛騨の武将にもお呼びがかかって実際に参陣しています。その後天正 4 年から 5 年は、謙信が越中を占領するという時期になりまして、そのとき江馬は継続的に上杉方なんですけれども、三木氏は反勢力となって織田方になっています。天正 6 年から 10 年になりますと、謙信が 6 年に死んでしまってですね、江馬氏も徐々に織田方について行くというような段階です。

その後、本能寺の後にまたいろいろとこう変わっていく。そのあたりもいろいろ面白いところがあ

るんですけれども、お時間があるので、この発表ではこれで越中と飛騨の関係の話は終わりにしたいと思います。

４、飛驒の武将の越中進出・在番記録まとめ

当時の記録のまとめますと、三木氏は家臣の塩屋秋貞が神通川沿いの猿倉城を、普請していた記録がありましたので、塩屋氏がいただろうということがわかります。また、近くにある栂尾城も、勢力下にあったということで良いのかなと思います。天正 4 年に飛州口に箇所を上杉方が押さえたお話、或いは天正 10 年から 11 年ごろには、城生城の城主・斎藤信利という人、城生城は先ほど紹介した岩木砦の川向いにあります。その斎藤信利という人が「猿倉両地」を押さえてますよっていうことが記録に残っています。この猿倉両地というのは、猿倉城と栂尾城セットで表した表現かなというふうに思いまして、そういった点で猿倉城や栂尾城が神通川沿いの飛騨と越中境のとても大事なお城、ということが史料から読み取れます。

この塩屋秋貞が富山にいた時期はいつかと考えますと、私の想定ですけれども、人質として派遣された天正元年ごろから、三木自綱が織田方になってしまう元亀 3 年末ごろ、西暦ですと 1570 年から 1572 年の短い時期にあたるのかなと思います。

では、江馬氏はどの時期に富山にいたか。皆さんお気付きかもしれませんが、文献の記録だけを見ていきますと、江馬氏がどこを押さえていた、という記録は全然出てこなかったですよね。全く記録が無いので、江馬氏の勢力がいつどこにいたという、直接的な記録はない、というような結論になってしまいます。

本当にそうなのかというところを、古文書で分析したいと思いますけれども、全部読むのは時間がありませんので、要点だけ述べたいと思います。上杉謙信が、江馬氏家臣の河上伊豆守という人に出した書状です。江馬輝盛が音信したことに対する御礼が書かれているんですけれども、その中に、「中務丞を越こされ候」と書かれています。つまり、江馬輝盛の音信を、河上中務丞が持ってきたと。そして中務丞が「口裏あるべく候」つまり細かいこと言うよ、と書いてあります。

この文章をちょっと概念的にしたんですけれども、この史料は、越中に出馬していた謙信に対し、江馬がお祝いの品を送ってくれたってことに対する、お礼の文書かなというふうに思います。まずやり取りとして、江馬輝盛が大元の発信者で、多分その下に部下がいます。僕らの組織で言うとですね、教育長とか市長が直接文書を出すっていうよりは、僕とか三好さんみたいな職員を通じて、違うところとやりとりをするってことが多いです。この書状もそういったことを表しているんですけれども、書状は（輝盛ではなく）河上伊豆守に出されてるんですよね。この河上氏を２人挟む意味が謎で、普通 1 人でいいのではないかなと思うんですよね。例えば河上中務丞が高原後にいたら、さらに伊豆守がいて江馬輝盛がいて、とやりとりとして無駄というか意味がない。さっきウレ往来の道を示したと思うんですけども、ものすごい険しい道を、中務丞が高原郷から越後までずっと

行き来するってのなかなか考えづらいことです。そう考えると、中務丞はどうも越中国内或いは飛越国境付近にいて、この書状の中継をしていたんじゃないかということが、この文書のやりとりから想像できるわけです。状況証拠的な話になりますが、河上中務丞富信という人が、伝承通りもしかしたら飛越国境付近あるいは越中国内に潜伏というか、しっかりいたんじゃないかということが想定できます。

他にも河上氏を挟む書状というのが何個かあって、それは資料の方に示しておりますけれども、富信もしくは富春が仲介となって、高原郷にいた別の河上氏とやりとりをしていたということが、ある時期の史料でわかります。それがどうも永禄7年ごろから、元亀 4 年頃までの期間ではないか、というのが私の今の説です。この後、天正年間に入ってくると、使者とかお坊さんを通したやりとりになって河上氏は、中継としては出てこなくなるんですよね。このころになると、河上氏が越中にいるっていうことが薄くなってくるのかなっていうところが、何となく想像できるところです。

では河上氏は使者としての役割しか無かったのか、次の史料を見ていきます。この史料しかないのでなかなか難しいところなんですけれども、河上富信から「唐式太」という人に出した書状です。唐式太というのは唐人親広の略称で、後に越中の国衆として活躍する人物です。どういう内容かというと、まだ唐人は越中にそこまで浸透しなくて、越中の差配を謙信に任せられていた河田長親という武将に、河上富信が取り成しをしているという史料になります。

河上富信は河田長親の奉行というか中継というか、まだ関係性ができていない武将が、河上富信通して河田にお願いをするっていう事実が、どうもあったんじゃないかということです。単なる使者じゃなくて、上杉軍における重要な役割を越中で果たしていたのかもしれません。

5、立地と縄張りから見る中地山城と論田山城

最後に、中地山城と論点田山城の立地や縄張りについて見ていきたいと思います。さっき言った通り2つの城は富山の大山町にあって常願寺川の沿いがあります。現在、有峰に通じる林道は川沿いに通じていますけれども、明治の地形図とか江戸時代の絵図を見ると、そうではなくて山岳地帯を通るウレ往来が、当時の主要な道であったと考えられます。ずっと険しい山の尾根を通るような道で、多分冬は通行が無理なんじゃないかなと思います。さらさら越えも 12 月なので、ウレ往来を通るのは厳しいかな、飛騨を通るなら神通川沿いなのかな、とかいろいろ想定ができるのかなというふうに思います。

この2城ともに、常願寺川沿いにあって、ウレ往来を抑えるような位置にあるので、河上氏が越中にいたら、ここにいてもいいだろうな、という立地になります。また、もう一方の出入りの神通川沿いは、三木氏家臣の塩屋氏が抑えているという点でやはり、江馬方の武将は常願寺川沿いの方がいいのかなと思います。三木氏の領域から常願寺川沿いへは当然いけませんので、そういった点でも、江馬氏の城の可能性が高いとように思われます。

これは中地山城の縄張り図で、富山県の報告書コピーになります。ちなみに、中地山城に行ったことあるって人、どのくらいいらっしゃいますか。約 10 名弱ほどいらっしゃいますね。なかなか行きづらいところにあり、私も去年この講座に合わせて行ってきたんですけれども、看板に「熊注意」と書かれていて、音がしてビックリして見たらヤマドリだったとか、そういうことがありました。中地山城の縄張りは堀が 2 つあり、外堀と内堀と言われている大きな横堀があるのが特徴です。この横堀が山城にあるんですよね。平地の居館にあるのは普通だと思うんですが、山城にこういう大きな長大な横堀があるってのは、なかなかないのかなと思います。一方、中心部はあんまり要塞化はされていないというか、大きな平坦地がなかったり、堀切とかそういうものがなかったりして、そこまで堅固とは言いがたいというような感じで、山城というよりも居館といった印象です。

山城にこういった外堀・内堀があるってのは、他の越中の城にはないように思われます。逆に江馬の城の中ではどうかというと、山城の長大な横堀とか、V字の竪堀とか、巨大な堀切とかを作るのは、江馬氏らしさがあると思います。こういった遺構は高原諏訪城とか傘松城とかに見られます。江馬氏の下館や東町城にも、居館周辺の堀があるので、そういった点で中地山城は江馬氏の「越中支部」みたいな形で、置かれたものとして考えてもいいのかなと思います。これは内堀の写真ですね、ちょっとへこんでいるところで、綺麗に草刈がされておりました。

これが類例ということで江馬氏館の堀の写真です。次は東町城で隣の敷地に神岡城があるんですけれども、住宅地のお立ち会い調査で、堀の跡が見つかったよ、って言っている人が隣におられる三好さんです。

論田山城はどうなのかというと、これまた発達した形で、土塁が城の曲輪全体をガードしているように見えます。城郭の専門家の方から言わせると、やはりちょっと発達した形、堀をガーンと掘るよりちょっと後の時代じゃないかなと言われています。土塁と切岸を駆使して城全体を防御している。中地山城より軍事的な色彩が強いと言えます。江馬の城でそういうのがあるかというと、土塁については実はありまして、それが今度国史跡に追加される傘松城です。この図は飛騨市が作った縄張り図なんですけれども、これを見ると土塁がずっと曲輪をめぐして防御しています。これは敵対勢力がいる古川方面に向けて、土塁をめぐらしているということが分かります。これは高山市国府町の梨内城でも同じような構造があると、評価されております。

まとめになりますけれども、立地から中地山城と論田山城は、富山平野から飛騨の高原郷方面に入るウレ往来を抑える位置にあると言えます。しかも、敵対勢力である池田城とか芦峅寺方面を意識した縄張りであると言えます。江馬氏の城としての類例となるような遺構もそれなりに残っているということもあり、越中に進出した河上氏がこの 2 つの城に一時期在城していたという想定は、可能ではないかというのが結論になります。

まとめ

最後のまとめになります。文献史料から、江馬氏や河上氏、三木氏や塩屋氏といった飛騨の武将が 16 世紀後半のある時期に越中に進出していたということは、同時代の文献で確認ができます。これはやはり上杉謙信が越中に出馬してきたということに関連して色々と捉えることができる。あるときには飛騨の武将に越中に出てこいよという要請があり、飛騨の勢力と上杉氏は影響があった、或いは連絡を取り合うということがあったということがわかります。

さらに、この状況は列強のバランスの中で一様ではなかったと言えます。今日飛ばしましたけれども、武田信玄と江馬輝盛がやりとりをしている文書も当然あります。信玄が死んだ、三木良頼、謙信が死んだとか、そういった要因でパワーバランスがガラっと変わったときには、飛騨の武将はすぐそれに対応するような形で、越中の勢力と敵対したり撤退したりというな変化があった可能性は高いのかなっていうふうに考えます。

城に関する記録についてはどうなのかというと、三木方については塩屋氏が神通川沿いの猿倉城を普請したという同時代の記録で残っていまして、前後の記録から栂尾城も想定できるかと思います。伝承にはある津毛城とかその先の今泉城というのは、もしかしたら月岡野の戦いに関連して伝承が広がった可能性はないかなというふうに思うんですけれども、そういったところで広げていく考え方もありかなというふうに思います。

越中国内の江馬氏の拠点に関する記録が残っていないのですが、河上富信あるいは富春という人が飛越国境の辺りにいて、上杉氏と江馬氏の本拠のやりとり・中継を担ったという状況は文献の記録から何となく想定できます。そして立地の関係から、塩屋氏と競合せずに、高原郷から越中へ出るという経路が明確な、中地山城や論田山城に河上氏がいてもおかしくないかなというところが結論になります。

そうしますと、位置図に示しているその周辺の範囲にある多数の山城について、伝承は伝わってないんですけれども、当然塩屋氏とか、江馬氏が押さえていたならば、こういったところも当然押さえていたわけなので、こういった城跡がどうであったかというところも、今後検討を加えていく必要があるのかなと思います。

最後に、先ほど課長の挨拶にもありました通り、傘松城が 2 月 21 日の官報告示によって、国史跡（江馬氏城館跡）に追加指定されることになりました。また古川にある姉小路氏の城跡群も国史跡になることが決まりました。今後、飛騨市はより城の調査・保存・活用を進めていきたいと思いますので、飛騨市や神岡まちづくり実行委員会の活動をよろしくご応援ください。ありがとうございました。

― 了 ―

＜対談＞

（パネラー）
萩原 大輔（富山市郷土博物館 主査学芸員）
大下 永（飛騨市教育委員会 学芸員）
（コーディネーター）
三好 清超（飛騨市教育委員会 学芸員）

【三好】では時間となりましたので、これより対談に移らせていただきます。先ほどご講演いただきましたお2人に改めてご登壇いただきまして、「飛越の歴史や史料から江馬氏の越中進出について考える」をテーマに進めさせていただきたいと思います。限られた時間にはなるんですけども、お二人の魅力を引き出せたらなというふうに思いますのでよろしくお願いします。今回、史料に基づいたご発表をお 2 人にしていただきました。それについての質問がかなり集まりまして本当に皆さんありがとうございます。とても限られた時間なので全部はお答えできないかと思うんですが、なるべくご質問に答えていただくような形で進めていきたいなというふうに思います。

まずはご発表いただいた方々お 2 人の先生からですね、これは足りなかったとかですね、いうようなこととかですねここをもうちょっと補足したい。もしくはお互いに対するご質問まで含めて、コメントというか補足があればお願いしたいと思います。まずは萩原先生どうですか。

【萩原】大下さんの話聞いて、あと皆さんの関心の中には1つには、実際に中地山城にほんまに入ったんか、入ってへんのかというお話があるんじゃないかなと思っていて、大下さんの最後のまとめでは、いただろうという可能性が高いんじゃないかというふうなことなんですね。さらに縄張りが山城の中ではちょっと特殊で、江馬氏らしさが出てるから、これやっぱり飛騨系の人間が入って作ったんじゃないかっていうお話は、僕は積極的に聞かせていただきました。僕の資料の、お手元の皆さんの 3 ページの上の方にですね、僕なりに何が変わったっていうのを、順番にまとめてるんですけど、僕しゃべったときには全くそれすっ飛ばしていたんですけど、やっぱり重要な史料として挙げられるのが、この2番、永禄 12 年（1569）名、第 5 次謙信出馬のとき

に、9 月 2 日付で、ちょっと史料引用してないんで申し訳ないんですけど、芦峅寺村、まさに中地山城と論田山城の川向いにある立山のでかい雄山神社があるところですけど、立山って一番上に立山の奥宮、それと中宮寺と呼ばれる芦峅寺があって、岩峅寺(前立社壇)ってのがあるんですけれども、芦峅寺村宛に江馬輝盛の花押が書かれた禁制が出てるんですね。禁制って何かっていうと、「これやったらあかん」っていうのを、言っていて、軍勢が乱暴狼藉したらあかんとか、放火したらあかんとかそういうのが出されてるんです。この制札は今は、芦峅寺の大仙坊さんが持っていて、本当は写真を載せたらよかったんですけれども、史料そのものは昔から知られているもので 1970 年代に富山県史資料編が出たときからも紹介されてる史料です。存在は知られてたんですけど、富山県史では、神保長職のサインだっていうふうな推定がなされていて、これは神保の制札だってずっと言われてたんですね。それが最近研究が進んで、やっぱりこれは江馬輝盛のサインちゃうか、って話になって私もそれでいいんじゃないかと思っています。これが何を意味するかというと、禁制っていうのはその村側、江馬さんが攻めてきたときとかに、ほらお前の主人がこう言うとるやろ。乱暴狼藉したらあかんやないかと言うてる。これを見せて江馬さんの兵隊が悪いことするのを防ぐ、そういう意味がある。てことは、村からしたら、実行力のある、お殿様から禁制をもらわなあかんから、当時芦峅寺には永禄 12 年段階で軍勢が来てたっていうことはまず間違いがないと思うんですよね。だから、その軍勢の拠点になったのが、芦峅寺村近くの中地山だったり論田山だったりっていうところにいたっていうのを考えるのが、基本的には自然なんですね。ただ、文献やってる人間は、そういうのが断定できなきゃ、いや一わかりませんねっていうふうに言うので、推定にとどめておくっていうのが私の立場です。

【三好】ありがとうございます。

【大下】僕も今の史料は富山県史の方に書いてあって、まだ本物を見たことがないっていうこともあって、今回は飛ばしてたんですけれども、立山博物館の図録にあったと思うので、また写真を拝啓したいと思います。

私の発表の内容になるんですけれども、天正 10 年の段階で江馬氏は八日町の戦いで負けてしまって、輝盛も死んでしまうんですけれども、その後も時政という人が生き残っていて、どうも金森が攻めてくるまでは生きてたんじゃないかという話ですね。その間は、佐々成政治側なのか、それとも上杉方なのか、富山側のいろんな研究を見てると、全部飛騨は一緒くたに、その時は三木自綱の勢力下というふうな理解をされてるんですけれども、どうも史料を見る限りですと、金森長近の禁制、萩原さんのお話と同じように禁制が出ているんですね。禁制が江馬の領地に出されていたり、江馬時政が領主として活動している記録があったりします。或いは、史料 43(25 ページ)になりますけれども、野上家の軍功覚書というのがありまして、この史料 1 つだけではなかなか難しいところがあるんですけれども、天正 11 年から 12 年頃に、佐々成政の

軍勢が高原郷に攻めてきたというような記録があります。これは越中の武将・城生城主の斎藤信利の家臣であった野上さんていう方の記録なんですけれども、その中で、最後の方に、江馬氏の本拠・高原を攻めたというような記録があります。この中で、斎藤は途中で佐々に居城を落とされて、その後取り込まれてしまいます。その時期的にいろいろ考えていくと、どうも江馬は佐々と敵対していた。江馬は、天正 10 年のときには、もう周りが責められても四面楚歌状態だったので、一旦信長につくんですけれども、どうもこの時期には上杉方に戻っているんじゃないかなっていうように思います。そうすると、さらさら越えのルートも、高原を通るルートっていう説をどのように考えていくかは、今後議論できたらいいのかなというふうに思っています。

【三好】ありがとうございます。お 2 人から今補足の説明のところをいただいたんですけども、新たな史料のご紹介もあってですね、また今日で全部終わるわけじゃなくて今後調べなくちゃいけないってことも 2 人の先生方も言われていますけれども、そこもちょっと気にしていきたいなというふうに思ってます。では会場の皆さんからいただいた質問に入っていきたいと思います。

お 2 人の方からですね、ものすごく、僕も知りたいというか、本質をついた質問をいただいてます。調べるときは、どんなことを考えて調べていくのか。ということですね。確かに萩原先生のお話もあったんですけども、歴史と伝承っていうところ、僕たちが話してるときに伝えられてるっていうような言い方をするときとかがあるというようなお話があったと思いますね。そこをすごく、差として聞いてくださいっていうなお話があったかなと、僕も記憶しています。また大下さんのお話でもですね、6 ページですかね、その 3 っていう史料に見えるっていうところでそこの 6 個目の〇、7 個目の〇で元亀2年・元亀 3 年ていうところがあるんですけども、元亀 3 年という説もあるけど自分は 2 年って考えてって、いうような発言もあったかなというふうに思います。同じ史料を見ても、きっと複数の研究者で見解があるのかもしれないというようなこととかですね、また年号が書いてないものをどのように調べるか。ていうようなことは、今回のご発表における礎になるんじゃないかなというふうに思いますので、その部分お 2 人のお考えとか調査の仕方っていうところを教えて欲しいなというふうに思ってます。萩原さんからよろしいですか。

【萩原】僕はずっと文献史をやってきました。今やったら、自治体史の編さんがすごく盛んになって、富山県なんかすごく早い。1970 年代に富山県史の資料編っていうのはすごい分厚いというか、いいのが出て、図書館に行けばいつでも見られるようになっている。

飛騨でも神岡町史の資料編とかいいのがあったりするし、実際、研究者じゃなくても一般の方でも図書館に行ってそういう自治体史をめくれば、中世文書とかそういうのが活字として読むことができる。それはやっぱり結局活字にした神岡町史であれば編さんした方が原文書を読んでそれを本にしてるわけですね。僕はさっき言いました性格が悪い人間なので、基本的に他人は信じないので、やっぱり本当にそうなんかというふうで、原文書を見たいっていう欲求がすごく強いです。

上杉謙信とか佐々成政とか、富山に関する史料の多くは加賀藩関係のものが多いです。加賀藩関係の史料は金沢駅から徒歩 10 分ぐらいの、玉川図書館という図書館があるんですが、その図書館に現物が今でも残されていて、あそこめっちゃサービスよくって、いつ誰が言っても原文書が出てくるんですよね。すごいところやといつも思いますけれども、そういうのを必ず見て、写真とって、家帰ってデジカメで見るみたいな、1 文字 1 文字、自治体史の翻刻があっているかどうかそういうのを確認していくっていう。そういうところで、意外に 1 文字違うだけで解釈ががらっと変わる場合があったりして、そういうのを発見すると、いや、この事実、今のとこわししか気づいてへん、って思ったりしてワクワクします。

僕がちょっと前に朝日新聞さんで紹介していただいた、明智光秀が本能寺にいなかったんじゃないかっていう説も、その玉川図書館で見つけた「乙夜之書物」っていう史料があって、それを紹介した本も、2 年前に出したんですけれども、やっぱり人生短いですから、生きてる間に見れる史料は全部みたいという欲求があって、玉川図書館も膨大な史料群があるんですが、せめて中世・戦国に関する記事は全部見たいっていうことで、分厚い冊子の 1 ページ 1 ページを見てて、興味があるのがあればパシャッって写真で撮って、ちゃんと読むのは家帰ってから、そういうのを繰り返す中で、光秀が本能寺にいなかったいう史料も発見したので、何というか研究者としていやらしい話やっぱり 1 発当てたい。自分が死んだ後も研究業績っていうのはある程度残ってるもんだから、いい研究をしたい。私の講演を聞いた後に、私の本とか、論文読まれた方がよく言われるのが、真面目すぎると、講演はこんな不真面目なのに、いうふうなことでよく言われます。

【三好】ありがとうございます。それでは大下さんよろしくお願いします。

【大下】はい。萩原さんほどの思いは無いかもしれないですが、私も基本的には文献史のセオリーとして、原文書が見られれば一番それがいいです。それとまずは資料編を見ることですね、自治体史の通史編とか、そういうのを先に見るとどうも先入観が入ってしまうので、まずは資料編から歴史を組み立てていく。今回の越中とか越後のお話とかも、僕はほぼ初心者ですので何を言っているんだって思った方も多かったと思うんですけれども、一応上越市史とか富山県史の資料編を全部見て、史料に何が書いてあるかっていうのを組み立てて、インプットしています。その中で、先行研究で言われてることはこうで、もしかしたら、同じ史料を見ていても違う視点で言うと違うことがいえるかもしれない。今回の河上富信がどこにいたかみたいな話は、そういう中で 1 つ思ったところなので、上げてみたっていう形です。

私もずっと中世史の仕事ばっかりしてるわけではないので、自治体職員としていろんな文化財のことに携わる中で、縄張りもそうですしいろんなものを見ながら、総合的に考える中で、ここまではいえるかなあ、という落としどころを探ります。飛騨はわかるところが少ないですが、ある程度わかりやすく皆さんに、ここまではいえるかもしれません、みたいな形で出せるといいなと思い

ながらいつもお話をしている感じですね。

【三好】ありがとうございます。それに関してもう 1 個質問が来てまして、二次史料って大下さんのお話の中であったと思うんですけど、こういうことはいえるのかな、って今まさにそのことかなと思うんですが、二次史料はどこまで使っていいんですかっていう、そういう質問を受けるんですけど、ちょっと参考まで教えてもらいたいなと思います。

【萩原】昔は僕も歴史の研究っていうのは一次史料。一次史料ってのは同時代の史料ですよね。昔は同時代の史料だけから組み立ててやるのがええんや、というのが 1 つの研究者としての倫理で、今もあると思うんですけど、でもやっぱそれは限界があって、最近やってる本能寺の変の研究とかだと、やっぱり限界があるんすね。光秀の動機、何で反乱を起こしたのかとかそういうのを迫るにはなかなか難しいところがある。で、一次史料・二次史料っていう言い方をするんですけど、共立女子大学の堀新先生が言ってたんですが、二次史料っていうのは、二級史料ではないというふうなことを言われていて、私はそれはすごく痛感するところです。二次史料っていうのは大きく 2 つの要素があるっていうふうに私はよく言ってるんですけど、同時代性と当事者性、この 2 つの要素がある。同時代性で言うと、二次史料は絶対そのあとで作られた史料だから、それは同時代のものじゃないから、それは参考資料になるよねっていう話になる。一方は当事者性って話で、例えば極端な例ですけど、ある芸能人が離婚したらしいねって僕が言ったところで、僕は芸能人の知り合いでも何でもないからそんなのは全然当事者性がない話だから、それは信じられない情報だっていうふうなことになるんだけど、例えば 60 年 80 年たったとしても、関係者の子孫とかが語っていれば、それはやっぱり当事者性っていう要素がある一定程度残るわけだから、それは単純に二次史料というふうに切り捨てるわけじゃないだろう、というふうなところなんですね。

飛騨の研究でもやっぱり江戸時代に書かれた史料とか軍記物によらないと、ようわからんというところがある、それは仕方ないところなんですが、その史料の同時代性と当事者性っていうのを踏まえながら、使えるところを使っていった方が絶対に歴史学としては生産的じゃないかなっていうふうに、真面目な話をしました、すいません。

【大下】全くその通りだと思います。やっぱり全部うのみにするっていうよりは、1 つ 1 つ見て、同じところの時代で、5W1H ですけど、誰が・いつ・どこでっていうのが二次史料から想定できて、そのあと関係する一次史料から見てもおかしくないとか、そういう総合的に見ていくものなのかなと思います。なので、二次史料だからよくないとか、二次史料でも全部うのみにして考えちゃうっていうのは両方ちょっと極端な話だと思うので、一次史料を軸にしつつ、二次史料を補足的にちゃんと使っていくっていうことは、必要なのかなというふうには思います。

【三好】ありがとうございました。史料が少ない飛騨地域ではずっとついて回る問題なのかなというなことで取り上げさせていただきました。それで、いよいよ中身の話なんですけど、今回 1 つ大

きなポイントとしては謙信っていうところがあるのかなというような中でですね、（質問として）永禄7年ごろに謙信本人またはその軍勢が飛騨に侵攻して、飛騨を降伏させたという伝承があると、先ほど話されたように確実な話ではないと思いますと、その辺り可能性を含めて、謙信の研究をずっとされてる萩原先生はどういうふうに、考えておられますかという質問いただいてますけども、どうでしょうか。

【萩原】歴史学的にやっぱり史料がないと、どうしてもわからないとしか言いようがないところがあるので、その永禄7年に関しては、確認されているか史料があるかどうか、それは何とも言えないんですけれども、現在把握されてる史料の中では、永禄7年に飛騨に来たっていうふうなことは、今のところは想定できない、というふうなことですね。問題なのは、じゃあその伝承はなぜ残ってるのかっていう方が僕は気になる。その伝承はいつから出てくるものなんかっていうのもすごく気になる。それが江戸時代初期の軍記物に出てくるのか、それとも江戸後期にならないと出てこないのか、江戸後期になってそれが最初に出てきたとしたら、それはなぜ出てきたのかってのはまたこれまた気になる。例えば、富山県でよく聞かれるのが、佐々成政が鍬崎山に埋蔵金を埋めたっていう話があって、僕は嘘やろ、と思ってて妻と一度探したんですが見つからなかったんですが、もし今日いらっしゃる方の中で、埋蔵金の場所ご存じの方がいたら、後で僕の携帯電話番号を教えるんで、それか飛騨市の財政課の方に言ってくれれば掘り当てて飛騨市の雑入に入れると思って言って欲しいですが、その埋蔵金伝説もいつから出てきた話なのか、僕も多少の下心で調べたんですが、江戸時代の史料にも出てこないんですよね。下手したら戦前ぐらいじゃないかっていうふうな思いもあります。世の中伝承なんていろんなとこに溢れてます。ただその現象がいつから生まれたものなのかっていうのは意外に意識されてないと。そういうところも踏まえながら伝承ってのは考えていく必要があるかなと思います。

【三好】ありがとうございます。すごくわかりやすいご説明いただきました。同じような時期のことでお大下さんにも、ご質問が来てるんですけど、今日も越中に向けてって話の中でだったかと思うんですが、実際江馬は武田との関係も大きかったんじゃないかというふうなところで、そこはどうだったんですかというような質問をいただいてます。

【大下】ありがとうございます。やっぱりですね、上杉家に残ってる文書が多いので、（江馬氏は）上杉方だったっていうふうにとらえがちなんですけれども、今日挙げている史料でも、例えば史料2とか史料 10 とかを見ると、どうも江馬氏と武田氏に通じているものもある。武田氏は滅んじゃっているので史料があまり残ってないんですけれども、もし残っていれば相当あったかもしれない。実際記録としてもある程度残ってますし、やっぱり行ったり来たりというかそういったことはあるのかなと思います。ただ、節目で出てくる永禄7年とか元亀 3 年の越中出馬とか、そういったところ表で出てくるところでは基本的には江馬氏は上杉方として立ち回ってるのかな、っていうようなイメージがあります。

【三好】ありがとうございます。やはりその辺史料の制約っていう部分も大なり小なり関係してくるのかもしれないなということで、今のお話をお聞きさせてもらいました。上杉・武田っていうところから、戦国が終わるようなときになったときに、織田とか佐々とか豊臣っていうお話を萩原先生の方からいただいたかというふうに思ってます。その部分についてもご質問が来ています。まず佐々と姉小路（三木）自綱が同盟関係だったというような中でっていうお話もあるけども、やはり織田方っていうことはまず間違いないのかっていうなところの確認のために質問をいただいてるということ。あともう一点それに関連してなんですけども、斎藤信五が織田方して上杉を攻めたときですね、（三木は）一緒に同行したのか、それとも通しただけなのかっていうと史料的にはどのように理解されますかというご質問をいただいております。

【萩原】僕の方から答えさせていただきます。直接的なものは大下さんのレジメの 23 ページの史料 34 だと思うんですけれども、『信長公記』という史料ですね。これも本屋に行けば、角川文庫本が今古本でしか手に入らないかもしれませんが、これ織田信長の伝記ですけれども、読み下しの文になっとって、割とすぐに読めるような状況になっとるんです。これ大下さん、ちゃんと岡山大学附属図書館のホームページから拾ってますね、信長公記の史料の写真がホームページで画像公開されてる。多分それを見て、1 文字 1 文字を確認してこのレジメでちゃんとまとめていただいてるんだと思うんですけれども、これを読むと、最後から2行目にこう書いてあります。「輝虎、相果てらるるに付て、飛弾」、騨の漢字を間違えているのですが、入力間違えじゃなくて原文通りで書いているんですね。続けますが「飛騨国司へ仰せ出でられ、 佐々権左衛門相添え、越中へ入国」とある。ようわからないけど信長から三木自綱に対して、謙信が死んだことによって、命令が出てですね、この佐々権左衛門をつけて、神保長住が越中に入国したっていうふうな事実関係が書かれているので、三木が信長方として支援をしたというか命令を受けてますよね。そういう立場で関与したってことは間違いがないんで、その時に同行したのかと言われると、これもやっぱり歴史研究の限界ということで、この史料からそこまで読み取ることはできませんっていうのが、真っ当な研究者としての返しなのかな。

【三好】ありがとうございます。大下さんも同じ見解ですかね。

【大下】そうですね。基本的にはそうなんですけども、さっき私の説明した通り、もしかしたら高原で戦いが起きたかもしれないっていうお話の中で、もしそれがあるならば、飛騨の勢力が積極的に関与した可能性もあるかもしれません。江馬氏はその時は三木と敵対勢力なので、おそらく八日町とか境目においてかもしれないんですけれども、小競り合いが起きた可能性はあるかもしれないんです。というとやっぱり飛騨を通って入ってきた可能性はないかなとか思うんですが、やっぱり歴史の難しさというか、100％とは言えなくて、私のイメージ的には 60％ぐらいしょうか。

【萩原】その時にルート上で、神保が岐阜の方から行った時に、江馬が妨害して高原で戦が起こるみたいな感じですか。

【大下】そうですね、基本的にはやはり神通川（現在の宮川）沿いで来るルートだと思うんですよね。なので、わざわざ高原の方を攻めてくるっていうのは、考えづらいんですけれども、積極的に考えるならば、河田長親等が江馬氏に支援を頼んで、江馬が妨害をした可能性はないかなとかそういうことならばありかな、と思った次第です。

【三好】江馬の方の領域を通ったってこと？

【大下】そうではなくて、基本的に宮川沿いの越中西街道を上がっていくのが順当だと思いますが、上杉方の河田長親が江馬氏に依頼して、（神保が）来るから邪魔をしなさいということがあった場合は、梨内城あたりから邪魔をしにいくということはあっても良いかと思った次第です。

【三好】わかりました、ありがとうございます。その辺りは図 1 に示されていますが、大下さんが作った図ですが、織田勢が飛騨をどういうふうに抜けていったかって言うようなそれを拡大したのが、図 2 なんですけど、今のルートでいうと、国道 365 号ですかね、越中西街道とほぼ重なるというふうに考えられてると思うんですけど、それを通った可能性が高いんじゃないかというようなお話だったかなというふうに思います。

江馬の話に戻って、中地山城・論田山城のことについて、ご質問が来ています。大下さんに、ということなんすけども、2 人ともにお聞きしたいと思います。大下さんのお話の中で、永禄 7 から元亀 4 年までは、河上氏がこの辺りにいてたっていう可能性はあるんじゃないかというなお話があったかと思いますが、その前後ですよね。江馬がいつから富山の方に進出していったのかっていう話のことだと思うんですけども、その前後のことは、どのようにお考えですかっていうようなご質問が来ています。また、それは越中側から見たらどのように考えるのかっていうことも教えてもらえたらいいかなというふうに思います。

【大下】そうですね。私の想定も説の 1 つだと思うので、なかなか難しいところはあると思いますけれども、河上氏が積極的に仲介役をしていたっていうのが史料でわかりそうなのが、その間（永禄～元亀）ということですね。その前後の時代は、はっきり言ってグレーですね。資料の 6 ページの一番上の方に参考として載せている史料1、これは古志長尾家の家臣である河上氏の史料で、完全に越後の話なんですけど、神岡町史にも載っている史料なので紹介しています。これが江馬氏家臣の河上氏に繋がっている可能性はあるかもしれませんし、もしかしたら有峰とかそういう地域に河上氏の勢力がもともとあった可能性はあります。また史料 11 を見ると、これもちょっとなかなか疑いがある史料ではあるんですけれども、神通川沿いの通行権を河上氏が持っていたというようなことがあり、もしかしたら以前からそういう素地があったのかもしれないんですけれども、文献では限界があると思います。例えば考古学の視点からどうかなと、遺物の編年等で分かることがあれば、逆に三好さんに聞きたいなと、僕は常々思っておりました。まず萩原さんのほうから。

【萩原】そうですね、まず前提として、今は上杉の家臣ではないんだということですね。上杉謙信

の晩年、自分の家臣はこれだ、みたいな名簿を作って、それを息子の景勝にあげてる史料があるんですけど、その中に飛騨の武将って出てこないんですよね。能登の武将とか、あとは一向一揆の人たちは出てくるんですけれども、そこに飛騨の江馬が入ってないから、謙信にとって飛騨っていうのはあくまで自分の領地ではない、そういう扱いですね。だから研究用語的に言うと国人とか国衆として、一郡規模の領地を持っていて、半ば独立的な支配をしていた人と、ゆるい同盟関係というか、そういう立場で、お願いをして、越中に謙信が攻めて来たときにちょっと手伝ってよ、っていうふうな形で来てもらってる、そういうことなんだろう。翻って江馬側からしたらそういうのを頼まれて、本当に富山に行きたいんかっていうのがすごく疑問なところがあるんですよね。「進出」っていう言葉が今回の報告でも出てきたわけですけれども。それが積極的な進出なのか、消極的な進出なのかっていう、その進出の質は問われなければいけないっていうのは思っていて、それは状況証拠とかから考えていかざるをえないんですけど、多分江馬は嫌やったんやろなというふうな感じはします。今日の大下さんの報告でも出てきますけど、新庄城に出張ってきたけどすぐ帰ったっていう話があったわけですよね。それはやっぱり別に行ったってメリットねえじゃんっていうふうに思うこともあるわけですよね。頑張ったら領地もらえますよとか言ったら当然頑張るわけだけれども、ここで頑張ってもなあっていうふうなところがあって、冬になる前に帰ろうか高原に、みたいな感じで、さらっと帰るっていうふうなパターンも当然あるわけで。謙信が富山攻めてきたのを、江馬は多分めんどくせえなあと思ってたんじゃないかなっていうふうに思うんですね。今はここは富山県、こっから岐阜県みたいに綺麗な県境としてラインが引かれていて、綺麗になってないところもありますけど、基本的には線引きされてるわけですよね。でも戦国時代ってそんな線引きはないはずで、ラインというよりゾーンっていうふうな考え方だと思うんで、ひょっとしたら謙信からしたら、中地山も論田山もほぼ飛騨じゃんみたいな、そういうイメージがあって、ウレ往来から行けばすぐに高原に接続できるわけだから、越中南部とはいえ、もうこれは飛騨のテリトリーだから、ちょっと同盟関係にある江馬に任せましたよっていうふうなことで、越中に進出させてるんじゃないかな。それは、領地を与えたっていう概念ではない。多分謙信からしたら、あくまでそれは飛騨の延長上として、その中で江馬に軍事的な権限を一定程度、裁量を任せているってそういうイメージなんじゃないかなというふうに思います。ということで、私の前座終わって三好さんどうぞ。

【大下】三好さんのお話の前に、後の年代の話なんですけど、河上中務丞は、史料 42 を見ると、後の時代にはどうも高原郷周辺にいて江馬の家臣として働いている、河上式部丞もそうですね。つまり、このときにはもう越中から引き上げてきてるんですね。江馬が嫌々でも積極的にある程度越中に遠征に行かないといけないという時期があって、越中を上杉謙信が取った、あるいはその後に佐々成政が来て、もう飛騨の武将が越中に関係することがないと判断したから、（河上氏も）高原に引き上げていったのかなと思います。逆に飛騨の牛丸という武将は、そのあとも

越中に根をおろして、その後は秋田藩で活躍したっていうことがあります。河上もそういう道があったような気がするんですけど、高原に帰ってきたんですね。河上さんといえば、今でも神岡に多い苗字で、和仁さんって人も多いと思うんですけど、もしかしたら末裔の方々なのかなというふうに思います。はい、三好さんどうぞ。

【三好】今の 2 人の話は中地山とか論田山を、飛騨の延長っていうところで捉えているのかという謙信の見方のところをちょっと教えてもらったのかなというふうに思います。きっとそれは考古学的にというわけではないんですけども、今日大下さんの話の中であった、遺構配置図ですね。縄張り図とも言うかと思います。その図で堀が二重になってる、ダイナミックなところは高原諏訪城に似ているとか、論田山の土塁のあり方っていうのは傘松城に似てるんじゃないかっていうなことがあったかと思います。まだ考古学的な発掘調査っていうものは、両城ではなされてないと思うんですけども、まず現地表に残ってる遺構の観察から見たら、大下さんの見解が 1 つの指針になるのかなというふうなことは、今日のお話を聞いて僕も考えました。

その上で、考古学的にっていうふうに言われると何ですけれども、出土遺物っていう当時の焼き物がどうだったというようなことがあると思うんですよね。この当時とか戦国時代の終わりぐらいになってくると、実は越中には、越中瀬戸っていう、焼き物がちょうどあたり立山町とかあの辺で焼かれ始めます。そのようなものが、今後新庄城とかに入っていってるのかっていう、目で見れたら面白いねっていうなことを、富山の研究者の方々は、おっしゃっておられて、まだ越中瀬戸が越中国内にどのような広がりを見せてるかっていうことを、今後検討されるという、ところぐらいなのかなというふうに思ってます。もしそのような目でですね、例えば飛騨の方で江馬氏館の発掘調査は進んでるんですけども、そこの出土遺物を見たときに、僕たちが今まで瀬戸美濃焼というふうに言ってるんですけども、岐阜県の土岐市や愛知県の瀬戸市の方で 500 年前から焼かれていた瀬戸物ですね、それの分類まで考えたものの中に、越中の瀬戸焼っていうのが入ってるかどうかっていうのは、再検証していく必要はあるのかなというようなことは、まだできてなくて考えているところです。

ただですね、この江馬の時代ではないんですけども、江馬館の周辺で住宅の建て替えとかのときに、皆さんにお願いをしながら、立ち会いをさしていただくんですね。神岡町殿の一体なんすけど、ほとんど皆さんのご理解のもとで立ち会いさせてもらう中で、江戸時代ぐらいの焼き物はいっぱい出てきます。瀬戸美濃焼の江戸時代のものが多いのか、越中瀬戸の焼き物が多いのかっていうのを、富山市教育委員会に持っていって、2017 年に見ていただいたことがあるんですね。その時、富山市教育委員会の人が、焼き物見て言われたのが、越中瀬戸は 1 つもないって言われたんですよ。なので、飛騨の方の文化圏では、どちらかというと南を向いてるというか、そのような流通の中で考える方がいいのかなというようなことを、それをそのまま中世に持ってくれるかどうかちょっとわからないんですけども、今の段階はそのような想定のもと、史料

の再検証したいなというふうに考えています。長くなりました、コーディネーターなのに、すいません。そんなことをしていると時間になってきました。

今お 2 人の先生方の話でですね、文献史料っていうのを、どのように検討していくのかっていうところからですね、誰が関わってるかっていう点で、当時の史料じゃない二次史料っていうのを見ていくんだよっていう、史料の見方を教えていただきました。またそのような検証の中でですね、上杉との関わり、史料がなかなか残ってないと武田との関わりというようなことを教えていただいたのかなというふうに思います。

最後、質問が来ているので、ちょっと佐々のお話も 1 点だけお聞きしたいなというふうに思います。これは確認というところになるかなと思うんですが、飛騨の方は、三木が統一をしていく、僕はそんなイメージで考えてしまうのですが、最後に金森が入ってくるっていうようなところだったと思うんですけども、それに豊臣秀吉と佐々成政の大きな流れのところを教えていただいて、大きな日本の戦国武将の流れの中で、飛騨を考えることができるのかなあというふうに思ったんですけども、もう一度その点を、越中の視点と、飛騨の視点で、教えて欲しいなというふうに思ったんですけども、よろしくお願いします。

【大下】そうですね。今日繰り返し述べている通りなんですけれども、天正 10 年に江馬氏が滅びたっていう認識は改めたほうがいいかなというふうに思ってます。江馬氏は天正 13 年までは領主として生き残っていたと。他の勢力に服属するわけじゃなくて、一応領主としての活動の史料が残っていて、土地の差配を行っているということから生き残っている。或いはまた、三木氏とも同じ動きをするのではなく、時には違う動きをしているっていうところはご理解いただけたのかなというふうに思っています。全国的に見ると飛騨は一つという認識が強くなってしまいますが、そうではなくてより細かく見ていくと、実は江馬氏っていうのは最後まで、一勢力として残っていたというふうに思っています。それが時代に応じてどういう動きをしたかっていうのをもう 1 回ちゃんとしっかり見る必要があるのかなというふうに思います。

それと全国的に見た場合、三木は佐々についたから滅ぼされたというようなお話ですが、私は地元出身で、地元の郷土史が好きなんで、いろいろ本を見る中で、三木自綱は飛騨を統一したから驕っていた、みたいなような書き方がしてあったりするんですけれども、それはちょっと間違いなのかなって思うところなんですよね。佐々は、秀吉に飛騨の取り次ぎを元々任されてて、ちゃんとした史料でそれは確認できます。なので、佐々と飛騨の関係が元々あってそれを追認なのか、積極的なのかちょっとわかんないんですけど、その中で、結局佐々が途中で秀吉から寝返っちゃうと、そしたら共倒しのような形になって、三木も秀吉の敵対側に入ってしまう。ちょっと三木は運が悪いかったねっていうような話なのかなっていうふうに思うところもありますが、その辺はまた、しっかり史料を見ていきたいなというふうに思います。

【萩原】大河ドラマとかでは秀吉が取り上げられることはあっても、その秀吉が北陸に攻めてきたと

か、まして、三木が金森に取って代わられたとかそういうのは全く出てこないんですよね。唯一、10 数年前の大河ドラマの天地人の第 23 回放送ぐらいのときに、笹野高史演じる豊臣秀吉が、富山城でお風呂に入っているという不思議なシーンが、あるんですけれども。当時、お風呂入らないですからね、サウナですから、そんな文句言ってもしかたないんですけれども、それぐらいしか秀吉の、天下統一戦争の中で北陸攻めってのは重要な位置を与えられてこなかったわけなんですね。ただ、当時の政治状況を考えると、秀吉の目下の敵は徳川家康なんですよね。

徳川家康を何とかして臣従させたいと。今までは同盟関係だったのを何とかして臣下にしたいっていうところがあって、秀吉はいろんなところから家康にプレッシャーを与えていく。当時家康とつるんでいたのが佐々成政だったわけなんですよね。その佐々成政とつるんでいたのが三木だったわけなんですよね。だから、秀吉は、京都から 7 万人の大軍を率いて富山に攻め込んで来るんですけれども、佐々成政を降参させてすぐ帰るっていう選択肢はしなかった。それプラス、一気に飛騨までやってきて、秀吉は来てないんですけれども、軍勢を派遣して、三木をとりあえず降参まで追い込む。そこまでしている。それはやっぱり、単純に飛騨を制圧したいいっていうふうなことだけじゃなくって、もう十二分にそのうちに自分が天下人になるっていうふうなことを構想の中に入れていく形の中で、飛騨の制圧っていうのが大事な 1 つのピースだったというふうなことを、証明しているようなものなんですよね。

だからそういう意味で、飛騨ってあんまり歴史の表舞台に出にくいところではあるんですが、そういう目で見ていくと、また当時の政治過程と密接に連動する中で、こういう飛騨の地域が大きく中世社会から近世社会へ変わっていく節目に当たっているところとリンクしているっていうのがわかってくるんじゃないかなというふうに思います。

【三好】ありがとうございます。本当に綺麗にまとめていただいたというか、飛騨地域の江馬とか三木とか姉小路とかというようなところもですね、周りの状況にちゃんと対応しながら、日本の歴史と連動しながら、勢力をどのように、動かしていくかを考えたということが今日のお話でよくわかっていただけ方かなあというふうに思います。

というところですいません、時間がきましたので、これで対談の時間は終えたいと思います。最後にですね、お一言ずつ、今日のご感想いただけたらありがたいなというふうに思います。

【萩原】今日は皆さん長時間ありがとうございました。今日、少しお話もしましたけど中地山城は縄張りから見たらこう見える、越中じゃない特色があるっていうふうなことでそれは文献だけではわからないわけですよね。でも、かといって、縄張り・城郭論だけ見てもそれはわからないっていうふうなところもあるので、あんまりこうやって歴史と考古が協働するってのは古くから言われてきてはいることなんですけれども、なかなかそれを地域史レベルで実践する場っていうのは意外に、多いようで少ないと思うんです。だから、こういう機会は非常にありがたいなと思っていて、そういう中から、ちょっとずつ歴史っていうのは更新されていくものとして、今日お話した内容も、

あくまで令和 6 年 3 月 3 日段階の、作業仮説に過ぎないわけでありまして、この後萩原が言った言葉は違ったな、っていうことがあれば、また歴史像が変わっていくので、そういう点も楽しみながら歴史のお話を聞いていただくとより面白いんじゃないかなと思います。本当に今日は最後までご清聴ありがとうございました。

【大下】ありがとうございました。今回、中地山城とか論田山城について、いろいろ調べたんですけども、結論としてよくわからないというのが大きかったと思います。しかし、ここまではいえるみたいなところは、今日の講演内容を調べる中である程度出てきたのかなと思います。よりその事実というか、どうだったかっていうことを想像する上で、考古学とか歴史地理とかいろんな学問も含めて、今後検討をした上で、富山の研究者の方々とか、自治体の関係の方々とも協力をしていければ、より良くなるのかなというふうに思います。今日は本当にありがとうございました。

【三好】ありがとうございました。最後に、本当にこんなにいっぱい質問いただきまして、最後の対談まで盛り上げていただきまして、ありがとうございました。帰るまでが歴史講座だ、というふうに思っていただきまして、気をつけてお帰りいただきたいと思います。今日は本当遠くまで来ていただいた方も多かったと思います。どうもありがとうございました。

— 了 —